



# シネマ気球

第33号 200円

シネマ気球©  
編集兼発行人 関田孝正  
〒270-0107  
千葉県流山市西深井339-2  
TEL 0471531533  
FAX 0471567122

## 破滅へ突き進むサス・ペンス

2012年のヴェネチア映画祭で、金獅子賞を受賞した韓国映画ということと、ポスターが

気になり、おじさんは渋谷までこの作品を観に行った。

キム・ギドクという監督のことは知らなかった。韓流テレビドラマに興味はないが、韓国映画は好きで、たまに観る。ねちっこく、暗く、恨みのこもった、重い韓国作品が好きだ。そしてこの映画も冒頭のシーンからガツンときた。

蒲田の町工場を彷彿とさせる零細企業の密集する町。そこで、高利貸しに使われる主人公ガン

ド。彼は、取立てが仕事の天涯孤独で非情な男。彼の取立て方法は、工場主に保険金で返済をさせること。

返済に困った借主を旋盤やプレス機で事故を装わせる場面は実に残酷でリアル。

男には罪悪感も、憐みもない。当然彼は、障害者となった人たちの恨みをかうが、意に介さ

ない。

そんな彼の前に母親を名乗る女が現れる。

なぜ今、母親が名乗り出たのか？ 本当に母か？

ガンドは自分の母を名乗る女を、部屋で抑え込み犯す。犯された女の慟哭の涙には、母の抑えきれない恨みと、悔しさがこもっていた。

大げさに言うならおじさんは、ここでギリシヤ悲劇を思い浮かべた。疑いながらも女とガンドの家庭的な生活が始まる。母親の愛を知った男の取立てに、少し変化が現れる。

観客は、母親の不可解な行動から、女の正体を知る。ガンドは母親の愛情を覚え、女に甘え、悲劇の十字架を背負わされて、破滅へ突き進む。緻密に張られた伏線が、見事にサス・ペンスを盛り上げ、クライマックスへと導く。

余韻を残すラストシーンが心に残る。

(絵と文・山下雄平)

## 天才ヒッチを描いた2つの作品

『ヒッチコック』

『ザ・ガール ヒッチコックに囚われた女』

門馬徳行

『ヒッチコック』は、『サイコ』(1960)誕生に秘められた物語で、ステイブン・レベロのノンフィクションをもとにしている。が、原作通りではなく、むしろヒッチコック夫婦のドラマが主に語られている。これを見ると、いかに妻アルマの存在がアルフレッド・ヒッチコックにとって大きかったかがわかる。誇張して言うとう、アルマなくしては彼の作品が生まれなかったことになるだろう。彼女はスクリプター&編集作業もこなし、映画界ではヒッチより先輩だったようだ。実際、パートナーとしては申し分なく試写で評判の

悪かった『サイコ』をヒッチに再編集させ一気に公開にこぎつけたり、公私とも彼を支えた様子がでてくる。が、要はそれだけ、後はホームドラマ風の話もあり全体的には天才作家ヒッチの内面までには入りこんでいない。ゆえに、彼がどのような動機で『サイコ』を撮ったのか、有名なシャワーシーンほどのように撮影されたのか、などは詳しくでてこない。映画ファンならまず知りたいたいところであり、あと1歩踏み込んで欲しかったのは言うまでもないところだ。

問題のシャワーシーンは、始め現実音だけで処理しようとしたが音楽のバーナード・ハーマンの意見もあり感情をさかなでるような旋律を入れることに。劇場ロビーで指揮者のように観客の反応を操るヒッチがでてくるが、音楽と映像が同調し見事にサスペンスを盛り上げた瞬間だった。ヒッチはかねてから、演出はオーケストラの指揮者のようなものだ、と語っていたというから、してやったりと思っただろう。ソール・バスの絵コンテをもとにこのシーンは撮影されたそうだが、それに2カット、ヒッチは付け加えたという。このシャワーシーンのカット割り

は、今でも恐怖を煽る演出のバイブルになっている。ジョン・カーペンターもこの場面を細かく分析し自作のお手本にしているそうだ。だが、別の角度から見れば女性をシャワー室でめつた刺しにする衝撃的な場面を撮ったヒッチの異常さは否定できない。彼の中にサデイズムの衝動があるのは万人の認めるところだ。いや、彼ばかりか、あのスピルバーグでさえ時には激しい暴力への衝動を描き、クロウネンバーグ顔負けのマゾヒスティックなシーンを撮ることがある。

これらは天才作家が持つ共通の体質ではないだろうか。テーマに結びついた残酷性を否定することは愚かなことだ。人間はもともと残酷な部分を持っている。おそらくヒッチは心のどこかで女性(つまり厳格だった母親?)を憎んでいるのではないか。いや、愛しても愛されることのない、すなわち自分の想いが報われないからこそ逆に暴力的になるのかもしれない。ここに彼を溺愛した母親の影響が強く残っているとする見方もあるが、あながち間違いとは思われない。

この頃、ヒッチは自分の映画に主演する女優を模索していた。イングリッド・バーグマンもグレース・ケリーも去り、ヴェラ・マイルズやオードリー・ヘプバーンにも出演を断られて巨匠ヒッチのプライドがかなり傷つき、心中、穏やかではなかったと思う。自分の夢や幻想を語る対象がみつからないのだから。

『サイコ』の製作費は自宅を抵当に入れ捻出したことも語られている。ヒッチと言えどもパラマウントは資金を出さなかったわけだ。パラマウントは残酷な場面だけでなくトイレのアップと水の流れる音を問題にしたらしい。それまで、トイレを映した作品はなかったからだ。会社側は暗いグロテスクなスリラーでは客は入らないと決断したわけだが、その意に反して『サイコ』は彼の映画で最高のヒッチト作になった。猟奇犯エド・ゲインを画面に出しヒッチと会話させるシーンがあったが、少し混乱する。ヒッチの分身みたいな存在にしかつたのだろうが、説得力がなくフィクションの弱さを暴露している(『サイコ』の原作はロバート・ブロックの『気ちがい』)。

この程度の夫婦の話なら普通の(バディ・ムービー)の域をでない。天才ヒッチを描くのであれ

ば、もっと深く、その人間性まで迫るべきではなかったか。映倫や会社との駆け引きなど面白いところもあったが、数々の映画監督にリスペクトされている作家の真実や素顔に迫るべきではなかったか、というのが本音である。私たちが見たいのは夫婦の物語ではないのだ。

4) ヒッチはこの後、『鳥』(1964)を撮る。

好みの女優を探してた彼は当時モデルだったティップ・ヘドレンに目をつけ主演に抜擢する。やがて、ヒッチは彼女に惹かれていく。その執拗さは回りの人間が気づくくらいだから相当大胆だったかもしれない。そのいきさつが彼女自身の話を元に作られたBBC/TV映画『ザ・ガール ヒッチコックに囚われた女』に詳しく語られていて興味深い。『鳥』のなかで、主人公(ヘドレン)が部屋の中で鳥の襲撃を受けるシーンがある。最初、危険な撮影なので人工の鳥を使うはずだった。が、急に本番で本当の鳥を使うことになる。このことはヘドレンには知らされてなかったらしい。撮影が始まりすぐ終わるだろうとスタッフは思っていたが、なぜか1日中、いや1週

間も続くことになる。彼女にとっではこの撮影は地獄だったろう。ヒッチはなかなかオナーを出さない。そのうちヘドレンは怪我をしてしまう。彼女は虚脱状態になり撮影は中断する。わずかなシーンに、どうしてこれほどの時間をかけるのかだれもわからない。作家としては前作のシャワーシーンを越える場面になければという意気込みは当然あっただろう。だが、実は別の要因があったようだ。ヒッチのヘドレンに対する思いは度を越してしまっていたらしい。ヘドレンはきっぱり彼の気持ちに拒否したが、それでも彼は諦めない。いさかまわず固執する。たぶん、このへんの気持ちの動揺もありヘドレンに対するしごきになったのではないかと思われる。もちろん、俳優をぎりぎりまで追いこんで芝居させる監督はいくらでもいる。ジョン・フォードしかりデイビット・フィンチャーしかり黒澤明しかりである。しかし、それらは演技の不足を補い、役柄のリアリテイをひきだそうとするひとつの手段だったろう。が、ヒッチは、そこに自我と作家としての意識を混在させてしまったのではないか。

『巨匠』としての自負もあり、また思うようにならない状況にいら立ったのではないか。その葛藤がヘドレンに対するするいじめに暴発したのではないか。その後、彼はなんとかこのシーンを撮り終え、合成や編集にかなり時間をかけ『鳥』を完成させる。こんなスキヤンダラスな事情があつても、『鳥』は見事なヒッチコックの作品になっていた。

撮影が終わったあと、ずっとヒッチを避けていたヘドレンだったが、説得されたのか『マーニー』(1964)に出ることになる。この時のヒッチの気持ちは複雑だったろう。『マーニー』にはなめるようにヘドレンを撮ったり、彼女のアップが多かったり、やたらじつと見つめる彼の視線を感じてしまう。どうにもならない相手をせめて映画の中では、という切ない想(妄想ともいえる)が感じられる。いわゆる得意の(サスペンス物)のだが一向に盛り上がらない。ただひたすら幼児体験がもとで男性を拒むマーニーの再生を描く。『マーニー』は公開当時酷評されたらしいが、今見ると、そんなヒッチの気持ちがひしひしと伝わってきて涙なくしては見れない作品になっている。ヒッチのヘドレ

ンに対する行為を非難する気持ちはない。そのことでヒッチ作品の評価が下がるとも思えない。むしろ厳格な母親の影響か(マザコン)とも言われたヒッチを少し身近に感じてしまう。天才が手の届くところにいるような気がしてくる。彼は、きつときびしい母親の手から逃れようとしたのにちがいない。溺愛されたから逆に束縛から解放されたいと思ったにちがいない。母の死後、彼の作品には否定的な母親像、暴君的な母親がでてくるという鋭い指摘がありそのことをはっきり示している。そして、これらの作品には母と子の姿が次々とでてくる。『サイコ』でも『鳥』でも『マーニー』でも母親の影がしっかりと作品の核になっているのだ。近年、この3本がヒッチの本質を知る上でのひとつのターニングポイントになると再評価されている事実は見逃せない。

もう60歳を過ぎた男の妄想と狂気が語られる2本の作品について触れたが、映画にはあまり知らざる裏面があり、また、作家の思わぬ素顔がひよっこりと画面から滲んでくるものもあり、じつに奥深い。その後、ヒッチは『引き裂かれたカーテン』(1966)、『トバ

ーズ』(1969)、『フレンジー』(1971)、『ファミリー・プロット』(1976)を発表してこの世

を去ってしまったが、彼の作品は不滅だろう。そして、いまだに彼を越える作家はでていない。おそら

く今後も(サスペンス映画の神様)として、ずっと君臨し続けるにちがいない。そして、あの温和な外

見とは想像もできない錯綜した闇が心の中でずつとくすぶっていたにちがいないのだ。

## 私のベスト1 『ブレードランナー』

岩館範子

今まで観た映画の中で一番好きなのは、リドリー・スコット監督の『ブレードランナー』である。だんとつ1位。好きな作品は何度も何度も観るので観た回数も多い。公開当時はまだ中学生。映画館のない田舎に住んでいたの、スクリーンでは観ていない。いつ初めて観たのか、どう思ったのかは全く覚えていない。ビデオを借りたのだと思う。今はDVDで5つのバージョンを観ることができる。

①全米劇場公開版 1982  
②インターナショナル劇場公開版〔完全版〕 1982  
③ディレクターズカット〔最終版〕 1992  
④ファイナルカット 2007  
⑤ワークプリント 1982  
①はデッキカードのナレーションがあり、ハッピーエンディング。(デッキカードとレイチェルが車で森を抜けるシーンと『シャイニング』のオーブニングの空撮の没フィルム)  
②全米公開版に、何シーンか暴力シーンを追加  
③公開前の試写会で使用したものを、スコット監督に知らせずディレクターズカットとして上映していたら、大人気。それならと監督の望むナレーションもハッピーエンディングもなし。デッキカードの白日夢にユニコーン(一角獣)のシーンを追加。クリーニングをして修正したもの。  
④作品ができて25周年。ディレクターズカットに修復を施し、リマスターしたもの。

⑤公開前に、デンバー/ダラスで上映されたもの。ナレーションなし。ハッピーエンディングなし。(1989に、ワーナーのフィルム貯蔵庫でナタリー・ウッド主演のミュージカル『ジプシー』(1962)のプリントをさがしてたら見つかった)  
こんなにたくさんのバージョンがある作品は他にはない。もちろんファイナルカットは日本でも上映された。新宿バルト9へ観に行つた。今になってスクリーンで観られるとは思っていなかったの嬉しかった。ドキドキしながら観た。

問題のあった所は直してある。最初にブライアントは、宇宙植民地のレプリカントが6匹スペースシャトルを奪って密航、3日前タイレル社に押し入ろうとして1匹死んだと言っている。それだとロイ、リオ、ゾーラ、プリス1匹足りない。2匹死んだとかわっている。  
アブドル・ハサンとデッキカードのセリフが唇の動きと合っていない。  
見とは想像もできない錯綜した闇が心の中でずつとくすぶっていたにちがいないのだ。

ハリソン・フォードは多忙のため、息子のベンに来てもらった。ゾーラがデッキカードに撃たれてガラスに突っ込んで行くシーンは、明らかに代役と分かってしまう。こちらは、25年前と全く体型がかわらないジョアナ・キャシディを呼んでグリーンスクリーン撮影。カット・アンド・ペイストという技術で、映像の顔に合わせ、軌道をなぞりパーツを組み立てる。それで違和感なくなっている。  
デッキカードのユニコーンの白日夢のシーンは、前後にデッキカードのアップが入る。(どういう表情なのかは読めない。)

ラストのロイが放つ鳩が、青い晴れた昼の空に飛び立ってしまったシーンは、鳩はそのまま、描かれたマット・ペインティングをはめこんだだけ。今にも崩れそうな古い建物を背景にした夜空になつている。意外な事に尺が一番短い。

公開の1982年は、『スター・トレック カーンの逆襲』、『コナン・ザ・グレート』、『カーペンターの

『遊星からの物体X』が公開。その上『E・T』の直後に、この『ブレードランナー』が公開。『E・T』と比べたら、こんな難解な暗いSFは売れる訳がない。『スター・ウォーズ』や『レイダース/失われたアーク〈聖櫃〉』のような娯楽作品にでてるハリソン・フォードが出演してるので期待されたのだろう。監督は人の何歩も先を

### メランコリアを見て

里中智子

「鬱病」や「鬱」のことを新聞などでよく目にするわりには、どういったものなのかはほとんど知らない。監督のラース・フォン・トリアーが、自身が鬱病を患ったことで「アンチ・クライスト」をつくとインタビューに答えていた。あのドロドロした混沌とした世界を描くことが治療に結びつくのだろうかと思っていたが、次作「メランコリア」はそのものズバリ「鬱病」である。最初から最後までどんよりとした空気が漂う希望も救済もない作品だったが、惑星

行つてるので、誰もついてこられない。だから最初はナレーションが必要だったのだ。

このいろんなバージョンを観て、それぞれの違いを見つければ楽しい。観る度に思うのは、ヴァンゲリスの音楽がいい。びったりだ。好きなのはタイレル社のオフィスとデッカードのアパート。キツチンの明かりが今で言うエコになっ

メランコリアが映し出される映像は時に美しく、中でも夜空に浮かぶ月とメランコリアには圧倒された。

作品は、第一部「ジャステイン」と第二部「クレア」に分かれていて、プロログにあたる部分にコピーライターであるジャステインが見ているスタイリッシュな夢の映像が流れる。未来を予見しているような内容で、惑星衝突という逃れられない運命が彼女たち姉妹を待ち受けていることが示される。第一部は、狭い道で新郎新婦を乗せた大きなリムジンが立ち往生している場面から始まる。クレア夫婦が妹ジャステインのために開いた結婚披露宴に向かう2人

ののだが2時間も遅刻して到着する。輝かしい日を迎えたジャステインにとつては姉夫婦の苛立ちなど眼中になく幸せそのものだったのだが、母親からはスピーチを拒否され祝福されず、上司からは式の最中にも新しいコピーを急かさ

た披露宴を台無しにされた怒りをぶつけられる。式の進行とともにジャステインの表情は徐々に陰鬱になっていき、終わってみれば夫も仕事も失い父親に救いを求めるが彼はメモを残し去ってしまうという最悪の日となる。キルスティン・ダNSTは自身も鬱病を経験しているそうだが、鬱病がもたらす深い絶望がどれだけ人を無気力にするかを迫真の演技でやりきった。

第二部では、惑星メランコリアがいよいよ地球に迫り、ジャステインの姉であるクレアの漠然とした不安が現実のものとなり苦悩していく様子が描かれる。避けられない死という現実を前にして絶望しつつも母として息子のために懸命に運命に抗おうとするクレアと、自身にとつて苦痛だけの現実世界をメランコリアが破壊し死によって解き放たれる日を心待ちにしているように見えるジャステインという対照的な姉妹に、鬱病を否定するか肯定するかという相反する感情の間で苦しんでいる監督自身の心の葛藤を反映させているように思った。メランコリアを地球に衝突させるといふやけっぱちとも思われるラストが監督の今後にどのような影響を与え新たな世界を創造させるのか次作が楽しみである。



〔描き手からの蛇足〕コマ撮り人形アニメ(?)の巨匠レイ・ハリーハウゼンの計報に接し、また自分自身もシネマ気球11回目を迎え初心に還る...という思いも込めて、今回はハリーハウゼンが生み出した「愛すべき怪物達」を描くことにしたのですが、なんかえらく時間がかかってしまいました。他にも入りたいヤツがいっぱいいたんだけどなあ。

## イラスト & エッセイ

# 愛犬と犬の映画と思い出と

中田好美

最初に観たのが西田敏行主演の『星守る犬』。この作品では犬が老衰で死んでしまうシーンがあり、ついこの間見た愛犬の死に際と重なり、号泣してしまった。

可愛いワンコに癒されたかった、はじめの一步で大やけど。犬が出てくる作品は内容を選ばなければ、悲しみのあまりまともに観られなくなってしまう。以降はあらずじを見てから借りる事にした。

シリーズ、チワワ、シベリアン・ハスキー、犬がテーマとなっている作品は数多く、出演している犬種も多種多様。全てを借りる事は出来なかつたが、20本観た中から犬映画セレクトションをご紹介します。

『HACHI 約束の犬』  
日本映画『ハチ公物語』のリメイク作品。  
公開当時、CMで「ハチ！」というリチャード・ギアの声が印象的だったこの作品。リチャード・ギアの優しい笑顔とハチ(犬種名秋田犬)の愛らしくもがっしりとした姿に癒される。

お気に入りのシーンは、パーカー・ウィルソン(リチャード・ギア)が駅に向かう列車の窓からハチを遠目で探すところ。列車が駅に近づき、ハチの姿が見えた時の、

パーカーの温かい眼差しがたまらない。

主人が帰らぬ人となった後も、ハチは毎日同じ時間に、同じ場所待ち続ける。

待つという行動に込められた飼い主への深い想い。

結末の描かれ方は温かく、じんわりと涙がこぼれる作品だった。『ターナー&フーチ/すてきな相棒』

警察捜査官ターナーと、とある事件をきっかけに共に過ごす事になった大型犬フーチとのドタバタコメディ映画。

作品冒頭で描かれる、スコット・ターナー(トム・ハンクス)の神経質っぷりが見ていて楽しい。鏡を見ながら鼻毛をカット、左、右と顔の向きを変え、またカット。

この仕草がおかしくて、台詞はなぐとも行動の一つ一つにターナーの性格が表現されていて面白い。

フーチ(犬種名 ボルドー・マスティフ)の登場シーンは、スロモーションとなり、この犬種のブサ可愛い特徴(ブルドッグに似ている)が余すところなく表現されている。普段は顔全体の皮膚が垂れ下がり、悲しげにも見えるフーチの顔つき。しかし、画面に向

かって走って来るその姿は、犬とは思えない迫力。垂れた臉が引つ張られ、鋭くなる目つき、めくれた口角からむき出しになる牙。犬ではなくモンスターに見えてしまう。

このわんぱくフーチと神経質ターナーのやりとりが現実的で、大型犬と過ごす家の中がどうなるのかを思い知った。

涎をほとばしらせながら、凄まじい力で家具を破壊。画面越しにもかわからず、思わず「ぎゃー」と口にしてしまった。

子供の頃、大型犬に憧れを抱いた私。この映画を観て、やっぱり飼うなら小型犬と思いついた作品だ。

『シャギー・ドッグ』  
『トイ・ストーリー』シリーズのバズ・ライトイヤー役でお馴染みのティム・アレン主演作品。

地方検事代理として働くデイヴ・ダグラス(ティム・アレン)は仕事に忙しく、家庭を顧みるゆとりもない。

しかし、とある出来事をきっかけに犬の姿になったデイヴは、犬として家族と接する事で、普段聞く事の出来ない妻や子供達の本音を知り、大切な家族との絆を見つ

2012年6月24日、その日の朝、浅い呼吸をしていた愛犬が最後の息をふっと静かに吐いた。痩せ細ったその小さな体を抱き寄せ、まだ温もりが残る体を撫で続けた。

看取った次の日、習慣となっていた愛犬のごはんを準備しようとして、ハッと我に返った。ああ、そうだ、もう居ないのだった。

愛犬がいつも居たその場所は、ぼっかりと穴があいたように、広くて寂しい空間になった。

寂しさを少しでも紛らわそうと、犬が出てくる様々な映画を手にとった。



め直す。

デイヴは犬の姿になるきっかけとなった、動物実験の実態を暴く為、人間と犬の姿を駆使して研究所に立ち向かう。

犬の仕草に合わせアテレコをする作品が多い中、こちらは一味違う。

デイヴが少しずつ犬に変わっていく様子を面白おかしく描く。

シリアルに入ったポウルに顔を突っ込んで食べたり、足を上げて用を足したり。一番の見所はデイヴの四足走り。猫を一心不乱に追いかける姿は犬そのもので、体当たりの演技に笑いが止まらなかった。

職業が地方検事代理なのも滑稽さを生み出す。意見を述べる際に感情が昂ると「ガルルル」と唸ってしまい、この奇行に周囲から怪訝な顔を向けられ、葛藤するデイヴに大笑い。

完全に犬(犬種名 ビアデッド・コリー)になった時の、巨大モップのようなもふもふした姿も可愛い。

人間と犬の姿を行ったり来たり人の姿で笑い、犬の姿に癒される、そんなコミカルな作品だ。

『ぼくとボビーの大逆転』

白くてふわふわの、小さな体で起こしたのは、人々の心を大きく動かす歴史に残る出来事だった。

スコットランドの首都、エディンバラで起きた実話を元に描いた作品で、エディンバラ版の忠犬ハチ公といわれている。

警察官のジョン・グレイ(トーマス・ロックヤー)はボビー(犬種名 ウェスト・ハイランド・ホワイト・テリア)と共に街の安全に努めていた。

しかし、ジョンは重い病を患ってしまい、ボビーを残し帰らぬ人となってしまった。

ボビーは、ジョンが眠る墓の傍で暮らすようになるが、墓地は犬が入ってはいけない聖域。管理人に追い出されては、囲われた鉄柵の外から土を掘って入り込み、ジョンの墓へと戻っていく。

そんなボビーの一途な想いに管理人や街の人々は心を動かされ、思い思いの形でボビーを支えるようになる。

しかし、平穏な日々は長くは続かない。ボビーを疎ましく思う権力者によって、ボビーは窮地に陥ってしまう。

そんなボビーを救う為、街の人々は一致団結し立ち上がる。

ポビーのふわふわした毛並みと愛らしい表情を見てみると、もぎゅーっと抱きしめたくなる。街の人々が愛したのは、ポビーの愛くるしい姿だけでなく、その勇氣ある行動力やジョンへの一途な想いのだと感じた。

ポビーの勇敢な姿は銅像としてエディンバラに置かれ、14年間ジョンの墓の傍で暮らした忠犬として、今も人々から愛され続けている。

## 『いぬのえいが』

犬をテーマに11の短編で作られたオムニバス映画。

全体的にコメディ作品が多い中、泣く事は無いと思っていた時、「ねえ、マリモ」で咽び泣いてしまった。

黒い画面に「ねえ、マリモどうしてなの」と飼い主の視点でナレーションが映る。その後映像が流れ、マリモ(犬種名 コリー)の成長とともに、飼い主が抱く感情をストリートに描写する。

その映像と自身の心情があまりにも重なり、その先を観るのが苦しくなる程、胸がいつぱいになっ

てしまった。  
人間の視点で語られた後、マリモ視点で描かれる。

自身の愛犬もこのような思いで傍に居てくれたのかなと思うと、また涙がこぼれた。

作品の合間に流れるクレイアニメも可愛く、オムニバス映画として様々なジャンルを楽しめる作品だ。第2弾となる『犬とあなたの物語 いぬのえいが』もおすすぬ『ファイアー・ドッグ 消防犬デューイの大冒険』

大切な人を失い、同じ傷を抱えながらも、ぎくしゃくしてしまう父と子。そこへ一匹の犬が加わる

事で日常が少しずつ変わってゆく。

作品の冒頭、ハリウッドスター犬として活躍するレックス(犬種名 アイリッシュ・テリア)の姿がCGも相俟って、少しオーバーに感じてしまった。しかしその後のシーンではCGを多用せず、犬の演技力で魅せる。

撮影中の事故によりレックスは見知らぬ街へと迷い込んでしまう。そこで消防士のコナー(ブルース・グリーンウッド)と息子のシェーン(ジョシュ・ハッチャーソン)に出会い、撮影時に付けていた首輪の名札から、デューイと名付けられ保護される。

一緒に暮らす事になったシェーンの部屋は散らかり放題。そんな

部屋を見兼ねたデューイは、ハリウッドスター犬として身に付いた見事な芸で部屋を上手に片付けていく。

このお掃除シーンの芸が細かいこと。洋服を啗えて分別し、鼻を器用に使い引き出しに仕舞う。お掃除の後には自分の体を洗ってと、洗剤ボトルを啗えながら、シェーンにお風呂を催促する。

いびきを掻いたり、おならをしたり、デューイの仕草が人間臭くて、なんともチャーミング。

図々しくも賢いデューイにシェーンは少しずつ心を開いてゆく。

類稀なデューイの能力は火災現場でも生かされ、消防署で働く隊員達にもその力を認められる。デューイはいつしか立派な消防犬として活躍し、ハリウッドスター犬ではない他の生き方を知る。

4頭の犬でデューイを演じ分けたというこの作品。犬の演技を生かそうという、製作者の思いがしつかり伝わる映画だった。

様々な犬の映画を観て、やつぱり犬っていいなあ、本当に可愛いなあ、と思うと同時に、共に過ごした愛犬の姿を思い出す。

最後に愛犬と我が家の実話をひとつ。

家で何度も話題になるほど尾を引く、不注意な飼い主(私)が原因で起きてしまった事故である。

小学生だった私は、兄と一緒に愛犬を連れ、友達のマッシュン(4階建て)に遊びに行った。

しばらく部屋で遊んだ後、愛犬と共に皆でマッシュンの屋上へと出掛けた。そこは柵などの囲いが全くない、今思えば、子供だけで立ち入るには危険な場所だった。

幼い頃から、ポーツとしていた私。そんな私とは対照的に、危険察知に長けていた兄は「屋上へ行ったら、絶対にリードを放すなよ!」と注意してくれた。

「うん!」と返事をしたはずなのに、屋上へ出たら心地よい風気が高まり、パツとリードを手放してしまった。

ハツと我に帰り、一直線に走り出した愛犬に気付くも、もう遅い。愛犬を呼ぶ声为空しく響き、フツと落ちる愛犬の姿と、金属製のへりに爪の引つ掛かる「キギイ」という嫌な音が耳に残った。

その瞬間、死んでしまったと思いい、私は腰が抜けて動けなかった。ただその場で泣く事しか出来なかった。

泣きじゃくる私の代りに、兄が

# 脱力と虚無が覆う終末の世界

『ニーチェの馬』

堀江広子

何という映画だ。脱力と虚無的な気分がじわじわと襲ってくる。ドラマティックなストーリーがあるわけではない。冒頭に映し出される老馬の必死の形相で馬車を走らせるシーン以外は緩慢に流れる画面に付き合うことになる。だがこちらの神経は逆に異様に研ぎ澄まされ片時も目が離せない状態になるのである。

殆ど台詞がなくモノクロで、登場人物たちの生活が困窮しているという点で、新藤兼人監督が1960年に公開した映画「裸の島」とダブって見えたのだが、「裸の

島」の人物たちは過酷な暮らしの中にも喜びもあり、畑を耕し子どもを必死になつて食べさせ育てるといふたくましさを感じたし、何より子どもは未来に僅かでも望みを託しているように見えた。

対して「ニーチェの馬」は、全く希望を見出せず、絶望に向かつて死ぬまでを生きている人間が描かれているのだ。馬も年老いて用のない生き物になってしまふ運命だ。

そして始めから終わりまで画面全体を襲っているもの凄風とその音に、僅かな望みさえ無情には

ぎ取られてしまうかのようである。つまり、この映画には未来も希望の光も射さず、ひたひたと近づいてくる死の世界への行進だけが確かなものとして描かれているのである。

世界の終わりを描いた映画に、2011年公開のラース・フォン・トリアー監督（デンマーク）の「メランコリア」がある。惑星が衝突して地球が滅亡するというパニックを起しそうなストーリーなのに、非常に耽美的で、ワーグナーの「トリスタンとイゾルデ」がバックに流れる中でその映像の

真つ青な顔で見下ろすも、屋上から下の道は見えない。兄は凄惨な現場を想像しながら階段を下り、落ちたであろう道へ出た。

しかし、驚く事に落ちたと思われる場所に愛犬の姿は無かった。兄はすぐさま、マンシヨンのベランダに落ちたのではと考え、落下範囲内にある部屋を兄妹で訪ね歩いた。

部屋を訪ねる際、「犬が落ちてしまつて」などと言えず、「ポ、ボールを落としてしまつたんです」と、泣き腫らしたくしゃくしゃの顔で私は訴えた。訪ねられた方は、よ

つほど大切なボールだと思つたかもしれない。

数部屋訪ねた所で、「ベランダにボールじゃなく、犬が引つ掛つていたよ!」と言ひ、驚いた顔で愛犬を渡してくれた。

話を聞くと、ベランダから伸びた植木にうまい具合に引つ掛つていたらしく、4階の高さから落ちるも無傷で生還。

マンシヨンの住人は何部屋か留守で、愛犬が落ちたその部屋は運よく在宅中だったのだ。

思い返す度にゾツとする奇跡体験であつた。

その後も愛犬にまつわる不思議な出来事は続いた。

祖母に預けた際、散歩中、車が愛犬にぶつかるも無傷。

心臓病で心臓の筋が切れていると診断されたものの、数カ月後の検査で筋が繋がつたと言われた。

「こんな犬は初めてだ」と獣医に驚かれる程、まれな症例だつたらしい。

病に臥してから3度ほど生死の境をさまよつたが、その度に生き延び、3年も長生きしてくれた。

長生きしてほしいという飼い主の想いに、最後まで全力で応えてく

れた。

尽きることのない愛犬との思い出。

よくある、「この胸の中で生き続ける」という言葉。今だから分かる、死んでしまつても思い出と共に生き続けるということ。

私の一目惚れからはじまつた、愛犬との出会い。小さな体で残してくれた、沢山の思い出。あなたと出会えて本当に幸せだった。

ミミ、かけがえのない愛しい日々をありがとう。

美しさに圧倒された。青く輝く惑星メランコリアと心を病んでいるヒロインの浮揚感、ヒロインの姉の恐怖感がクロスして、滅んでいくことに共感さえ抱いてしまうような映画であった。

だが、「ニーチェの馬」は一縷の望みも抱かせず、突き放すように終わりを迎えるのだ。このような作品を、何故撮ろうと思ったのだろうか。

### 人間社会の終焉

脚本も手がけたハンガリーのタール・ベール監督。

19世紀の哲学者ニーチェがトリノにおいて、むち打たれ弱っている馬車馬を見て思わず駆け寄りその首をかき抱いて泣き、やがて発狂したというエピソードを基に、監督は馬のその後を描きたいと思っただろう。

ニーチェが情を深くかき乱された馬を通して、人間の「生」の終焉を映像で表現している。その手法は、代表作「倫敦から来た男」に見られたように、いつの時代で、どこの国で起きた事なのかは一切語られない。ただ、その馬の出自がトリノだからイタリアなのか、あと見当をつけるしかない。そし

て父娘と馬の運命が、彼らを取り巻く過酷な環境によって終わりを告げるのを観客に見届けさせるといった描き方なのだ。

ニーチェの有名な言葉に「神は死んだ」というのがある。

「神は死んだ」とは一体どういう意味なのか。平たく言うところ、紀元後のヨーロッパ文明のバックボーンであるキリスト教的価値観や道徳観を全面否定することらしい。

無神論の哲学者は他にもいるだろうけど、明確に筋道立てて隅々まで否定したのはニーチェだけであるとされている。

ニーチェはまた、民主主義や平等主義もキリスト教の俗化したものとして嫌悪したという。ニーチェという人は偉大な哲学者だったかもしれないけど、人間とことん極めようとする気も病んでくるだろう。

全くの私見であるが、ニーチェは、神を否定したのではなく、むしろ神を崇め神の思し召しどおりに生きることこそが人間の生きべき道だと思っていたのではないだろうか。

創造主である神が七日間でこの世を創ったとされる創世記を逆行させるように、農夫らしい父娘の

一日目、二日目、三日目と6日間を見せる。7日目は神の安息日だから6日間である。無から有ではなく、有から無への行程を淡々と描いていく。

冒頭、もの凄い風の中、馬車を疾走させる馬の表情が非常に苦しそうだが走り続けるしかないこの馬の宿命を哀れむ観客を、あざ笑うかのように長回しが延々と続くのだ。長回しはタール・ベール監督が好んで使う手法だという。

家畜の運命は常に飼っている側の都合に委ねられている。野生の動物は、自然の営みの中で運に委ねられ、植物もまた然り。では人間の暮らしはどうなのだろう。

馬車を操る老人はやがて家にとどり着いた。そこは閑静な田園風景の広がる場所などではなく、人の手が入っていない荒れた土地に、かるうじて井戸があり、吹き飛んでしまいうような小屋のような家とぼろぼろの馬小屋がぼつんと建っている。近隣には誰かが住んでいる気配はない。社会と隔絶しているような場所なのだ。しかも生きる物全ての気分を落ち込ませるに足る無茶苦茶な風が常に吹きまくっているのだ。最初から最後まで。

老人には妙齢の娘がいる。馬車

といい娘の服装といい現代ではないことは確かである。19世紀頃の右腕は麻痺しており、着替えを娘が手伝う。焼酎のようなものを老人が呑む。食事は茹でたジャガイモ一個ずつ、これが全てだ。食事の前の祈りもなく、粗末なお皿にのせたジャガイモをフォークも無く手で皮をむいて塩をつけてほおばる。そしてそれぞれ床に就く。一日目が終わった。

二日目、むろん風は吹き付けている。家から離れた井戸に娘が水を汲みに行く。馬の様子を見る。馬は水も飲まずエサも食べない。かなり年をとったのか、長年の重労働に耐えられなくなってしまうのか、娘が心配する。

結局老人は馬を走らせるのを諦める。

三日目だったか四日目だったか父親の知り合いらしき男がやってきて何やら哲学めいた言葉を一方的に発して去って行く。翌日には荒くれ者たちが井戸水を勝手に汲み上げ、娘と一緒にアメリカへ渡ろうと誘う。娘は断り父親が追い払う。その際に男のひとりが娘に本を与える。娘は夜、父親が寝てからそつと本を開く。神がどうと

か書いてある。

5日目にはついに井戸が枯れてしまい、父親は別の土地に移るべく荷造りをして、弱った馬と娘を連れて出るが、じきに戻って来る。どうやらよその土地も同じ状況らしい。

その夜には、とうとうランプも付かなくなる。油はかろうじて残っていたのに。

6日目、水もないのでジャガイモを生でかじる父親。娘はもう食べる気力もなく呆然としている。

あの強い風は永遠に吹き続けるだろうと予測させて映画は終わる。

このような衝撃的な映画の終わり方で、タル・ベール監督は、一体何を言わんとしているのか。少なくとも、面白かったとか、共感したとか、感動したとか、考えさせられたとかという感情は湧いて来ないだろう。

だが、今後の人生の中でこの映

胸躍る興奮をありがとつ

鶴田 聖

僕にとつて、物心ついた子供の頃にワクワクした映画と言えば、それはチャンネルバラでも西部劇でもミュージカルでも喜劇でも、もちろん色っぽいお姉サンの出てくるセクシーな映画でもなく、この世ならぬ異形のもものが登場するホラ

画はきつと脳裏から離れず、ボデイプローのようにきいてくるような気がする。もしかしたら自分も映画のような終末を迎えるかも、という不安が頭をよぎる。

世界の終わりがあるとするならば、ハイテクな物に囲まれた我々の現在の状況から最も遠いと思える終わり方が、最も現実味を帯びているように思う。

風の正体

彼らは何の手立てもせず本当に死んで行くのだろうか。人はそんなに弱い生き物であろうか。人間ならば知恵と工夫で、(言い方を変えて人類の英知で?) 乗り切ろうとするだろう。

しかし、よく考えてみるとそれは怪しいかもという思いもわき起こってくる。

文明が進んだ今でも、戦争をなくすこともままならない、科学の

ーやSFやファンタジーだった気がするんです(あと漫画映画も)。

中でもレイ・ハリーハウゼンの手による精密な怪物達は、日本の着ぐるみ特撮怪獣(これも僕は大大好きですが)とは全然違う不思議なリアリティを持っておりました。

実写の人間と合成されたハリー

粋を結集して作った筈のあの原発も自然の猛威にはひとたまりもなく、しかもひとたび事故すると制御することすらおぼつかない有様なのだ。

人間の歴史は長い。けれど歴史の中で蓄積されてきた膨大な知恵は、自然の営みから見ればほんの小手先のものかも知れない。

それにしても、最後までずっと吹き続けていたあの風、あれは一体何だろう。

考え過ぎかも知れないが、あるいはあの風の正体は、世界中のあらゆる国が無関係ではいられない経済的グローバルゼーションの姿ではないだろうかと思えてくる。

一歩外に出ると風は、父親、娘、馬の肌を刺し、衣服にまとわりつき、まともに歩くこともままならずどこまでもつきまとうのだ。ゴーツという唸るような音と何もかもを巻き上げている状態の映像を

ハウゼンの怪物は、スクリーン上で作り物の違和感をほとんど感じさせません。コンピュータ内で一度抽象化されざるを得ないCG画像と違って、即物的身体性の延長線上(何のこっちゃ?)で創られるハリーハウゼンのコマ撮り人形アニメの怪物達には、形而下的な意味で血がかよっていたんじゃない

眺めていると、人の理性や知性などはどこかへ飛んで行ってしまいうだなど感じる。

それは、世界の政治経済の影響を、否応なく日々受けながら暮らしている今日の我々の姿と重なって見えるのだ。そう考えると、人間ひとりびとりの人生の、何と哀れで何とちっぽけなものだろう。

タル・ベール監督は、人の人生がどのようにして終わるのかを描きたかった、決して社会的、歴史的な観点から撮ったというわけではないというような事を語っている。

どのように捉えるかは映画を観た人にお任せしますというスタンスが、清々しく思えてくる。

そして、映画を撮るのはこれが最後だとも語っている。

いのかなあと思ったりもするのです(空飛ぶ円盤でさえ躍動感に溢れて空中を疾駆するのだ)。僕のノスタルジックな思い込みに過ぎないのかも知れませんが、子供時代の僕に胸躍る興奮を与えてくれたレイ・ハリーハウゼンに、感謝の思いとご冥福の祈りを謹んで贈りたいと思います。

## ウソと優しさが生んだ

## コメディ

『ロボジー』

関口健一

この前、WOWOWで『ロボジー』を見た。公開当初、映画館で見ようと予定していたのだが、体調を壊してしまい行けなかった。ロカビリー歌手のミッキー・カーチスが、五十嵐信次郎という本名で主演した映画だ。彼がどんな演技をするのか楽しみみだったのである。

ストーリーはこうだ。弱小家電メーカー「木村電器」で働く三人のエンジニア(濱田岳・川合正吾・川島潤哉)が、ロボット博に展示するロボットを開発していた。ただ発表の一週間前という時に

なつて、「ニュー潮風」と名付けられたそのロボットは、壊れてしまった。社長(小野武彦)ひいては会社の期待が大きかっただけに、このままでは首になってしまふ。途方に暮れた三人は、窮余の一策、ロボットの中に人間に入ってもらおうと思案し、着ぐるみショーの人材募集と偽って、求人広告を出す。

何人か応募してきた人の中に、七三歳の鈴木重光という老人がいた。鈴木は、妻に先立たれ、娘(和久井映見)は嫁に行き、パチンコと酒に明け暮れる一人暮らしの日々を送っていた。そんな状況の父親に、娘は苛立つて「遊んでいないで、働いたら……」と言う。娘に小言を言われた翌日に、新聞の折り込み広告で見つけたのが、着ぐるみショーの募集だったのである。

オーディションにエントリーした鈴木を、三人は老人には無理だと追い返すものの、「ニュー潮風」の中に入れる背格好の人は、彼しかいなかった。仕方なく、採用の電話を掛ける。かくして大いなる不安を感じつつ、「ニュー潮風」に鈴木老人が入ったのロボット博参加となる。

ロボットの展示ブースには、たくさんの見学者が集まっていた。着ぐるみショーだと信じていた鈴木は、初めエンジニアの指示通りに動いていたが、お客さんが楽しんでいないことに気づくや、突然隣のブースから聞こえてきた音楽に合わせて踊りだす。

その様子を見ていた女子大生の佐々木葉子は、急いでデジカメラで撮影を始める。が、カメラを回すのに夢中になり過ぎた彼女は、展示ブースを隔てるために設置してあるポールに、足を引っ掛けて転んでしまふ。「ニュー潮風」の中の鈴木は、彼女に手を貸し助け起こす。その一部始終がマスコミに取り上げられ、大反響を巻き起こす。……葉子も初めの内はずいロボットだと感心しきりだったが、次第に「ニュー潮風」の中には人間が入っているのでは、と疑い始める。

酒とパチンコだけの日々に明け暮れ、娘や孫に嫌われている老人鈴木重光を演じた、五十嵐信次郎の演技はとて面白かった。マイクを手に取りロカビリーに酔い痴れる、歌手ミッキー・カーチスは全然違っていた。

ミッキー・カーチスこと、五十嵐信次郎の年齢は、七四歳。れっきとした老人である。ひよっとしたら、こっちの方が本当の姿なのかもしれない、とふと僕は思った。

そしてもう一人。佐々木葉子を演じた吉高由里子の、「ニュー潮風」にのめり込んでいく様子が、キュートですごく良かった。新聞に載るとその記事を切り抜き、テレビに出ればビデオに録画し、ついには「ニュー潮風」の追っかけを始める始末。まさに恋する乙女的状況。そんな彼女は、自分が通う大学に「木村電器」のエンジニア三人を招き、講演させてしまふ。招かれた三人は、若い女の子に会えると、ウキウキ気分が大学へ行く。だが、講演が始まったとたんの質疑応答。学生らの難しい質問に、三人はまったく答えることが出来ず、しどろもどろ。そこへ葉子が助け舟を出す。

葉子の答えに、「その通りだよ！」と三人は胸を撫で下ろすが、専門家であるべき自分らが、逆に学生にロボット工学を教えられてしまった、という思いに駆られる。そのシーンの葉子と三人のやりとりが、僕にはとても面白かった。

「ニュー潮風」の気は、次第に高まっていった。そんなある日、鈴木が孫たちに、

『「ニュー潮風」に会わせてやる。』

と言出した。孫たちも、その母親も半信半疑ではあったが、ともかくも約束である、待ち合わせの場所へ出かけてはみたものの、案の定「ニュー潮風」ばかりか、言い出しつべのお爺ちゃんさえ現れなかった。娘と孫たちは、騙されたとばかり、怒って帰ってしまった。長引いたイベントをやつたことで終えた鈴木は、大慌てで出向くものの、すでに行き違っていた。

悔やみきれない鈴木は、ロボットの恰好のまま、タクシーに飛び乗り、娘の家へと向かう。突然やってきた「ニュー潮風」に孫たちは大喜び。ポディーに触れたり、写真を撮ったり。だがひとつと

つの仕種に、孫たちは子供特有の勘で、

「ロボットの中身は、お爺ちゃんかもしれない。」と……気付く。「そんな筈ないでしょ。」母親は一笑に付す。

普段は相手にもされず、こんな恰好をした時だけ持て囃される鈴木が、なぜかとても可哀相に思えた。

その頃、「木村電器」の三人は、イベント会場から突然いなくなった「ニュー潮風」を捜して右往左往していた。事故にあったのでは？ 警察に届けるべきでは？ 心配がピークに達した頃、当の「ニュー潮風」はどこ吹く風とばかり、タクシーで帰ってきた。三人は胸を撫で下ろしながらも、ロボットの恰好のまま一人で歩かないで欲しいと、鈴木に懇願する。

『「ニュー潮風」の中には、人間

### 大監督の始まりの道

「はじまりのみち」(原恵一)

戦時中の木下恵介の小エピソードを描く。後の大監督のまさに「はじまりのみち」を描く。自作「陸軍」を軍部から批判され次回の映画が撮れなくなった木下(加

が入っているのでは?)ロボット博の会場で助けられたとはいえ、その後何度か接触を重ねるうちに、葉子の中に疑問が芽生える。その

疑問は、日毎に大きく膨らんでいった。同じロボット博の会場で知り合った、テレビ局の伊丹女史(田畑智子)に話すと、彼女は半信半疑ながら、まず証拠を持つてきて、そして詳しく聞くから……と、葉子にカメラを渡す。張り込み開始である。「木村電器」の会社から出てきた車の後を、バイクで追いかける葉子。車はとある民家の前で止まり、降り立った「ニュー潮風」は家の中へと入っていく。

尚も見張りを続けていると、ロボットの恰好のまま、頭の部分だけを脱いだ鈴木が、ゴミ出しに現れる。葉子は驚くとともに、「ニュー潮風」の中に入っていたのが老人だったことに幻滅する。だが証拠写真はばっちり撮れた。

送る場面が延々と流されるが、感動的。このシーンを軍部は女々しいと批判した。しかし、観客には感動を与えた。一観客である便利屋(濱田岳)からも称賛され木下は涙を流す。

母親との思い出をもっと描いたらよかったです。ではないか。

早速伊丹女史に連絡する。女史は急いで葉子の元へ駆けつけた。証拠の写真を確認。

数日後、「木村電器」に報道陣が群がる中、伊丹女史は三人のエンジニアに疑惑を突きつける。まともな応答ができないほど困り果てた三人に、思い余った鈴木は、ロボットに仕舞ってあった本物の、だが動くことのない「ニュー潮風」を窓から放り投げてしまう。「ニュー潮風」はバラバラに壊れ、散乱する……

監督・脚本は、『ウォーター・ボーイズ』や『ハッピー・フライト』の、矢口史靖。弱小電器会社の見栄と、孤独な老人の寂しさ、ロボット・マニアである女子大生のコミカルさが、上手く絡み合った作品だと思ふ。私にはとても面白い映画でした。

小さな物語だが、大きな名監督になる未来が待っていた。暗いトンネルを抜けようとすする主人公の未来を暗示するラストだ。こうと決めたらそれに突き進む性格だったという——この道でなければという強い意志が何事かを成し遂げる人にはあるのだ。(せ)

# 『牛の鈴音』——母のこと、そして祖父母のこと

久保嘉之

韓国の慶尚北道は奉化郡に位置する、とある寒村。瀟々たる家に、肩寄せ合って暮らす翁と媪。二人の顔には、長い年月を風雪に晒されながら従事してきた農作業による、深い皺が刻み込まれている。生活は貧しい。その老夫婦と共に三十年という星霜を生きてきた一頭の牛。この映画は、その牛が老いには勝てず死んでいく様子と、それを見守る老夫婦の姿を追ったドキュメンタリーである。何年もかけて準備したものであろうが、映像は主に老牛が死ぬまでの一年間に、焦点が当てられている。

一幅の絵画かと思えるショットが点綴される、牧歌的のどかな感じの佇まいをみせる風景。だが

そこにも確実に、生の息吹と死の虚無は存在する。映画は、それらを丸ごと包み込んで、実に淡々とした、静謐な映像の広がりをみせてくれる。田舎の景色、それも牛が題材ということもあるのだろうか、撮影したチ・ジュウの画は、とても素晴らしい。

どんなに貧しかろうと、どんなにささやかでつましい暮らしであろうと、そこかしこに生命の尊厳は満ちている。だが命あるがゆえに、たとえ十年一日の如く、抑揚に乏しく変わり映えのしない日々であっても、生きてあることの過酷さに、翻弄され続ける。そして誰しも、いかに背負わされた宿命とはいえ、日常の中で死にゆく命消えゆく魂を看取ることの哀惜を経験しなければならぬ。それは人間だけにとどまらない……

胸の奥を滾るほど熱い思いが去来する。だがそれすらも哀しく切なく、浄化されていく。

監督であるイ・チュンニョルは、チ・ジュウに撮らせたフィルムを見事に編集している。そこには一片の銜いもなければ、気負いもない。その構成員の確かなが、作品に透明感をもたらしている。

そして——どうやらその透明感には、私にとって触媒の役割を果たしたようだ。普段脳の奥深くに仕舞い込まれて、絶えて思い出すこともなかった幼児期の記憶が、堰を切ったように鮮明に浮かび上がってきたのである。

私の母の実家は農家である。いや、今では農家だったというべきだろう。祖父・祖母共にすでに亡く、母のすぐ下の弟がそこに住居しているが、高齢でもあり後継者もないことから、いつともなく廃業してしまった。子供の頃は「田舎ん爺ちゃん家」と呼んで、泊りがけでよく遊びに行ったものである。

私が生まれ育った長崎の街は、高い山脈こそないものの、平野部が極端に少なく、入り江を囲むようにして海岸線からすぐに、山肌がせり上がっていく。そのため坂が多い。というより、ほとんど坂ばかりである。「爺ちゃん家」は、連なる山脈のほぼ山頂に近いところに、建っていた。部落の戸数は五軒ほど。当然段々畑に棚田である。庭に佇むと、眼下はるかに市街地が一望できた。

当時住んでいた我が家からは、ボンネット・バスを乗り継いで麓の終点まで行き、そこから山道をてくてくと上るのである。歩きだけども、子供の足で小一時間かかっただけかと思う。だが気にも苦にもならなかった。私は「爺ちゃん家」が大好きだった。

テレビもまだ普及しておらず、ましてゲームや玩具などあろう筈もなかったが、遊ぶ場所は無限にあったし、遊び道具がなければ、それらしきものを自分で拵えればよかった。町場に住み暮らしたの

では味わえない新鮮な驚き、そう呼べるものが確かにあった、と思う。

一度、鶏が空を飛べるかどうかの実験を、試みたことがある。抑えられない子供の好奇心である。「爺ちゃん家」は部落の中では一番高台の、しかも三メートルほどの高さの石垣の上に、在った。庭で餌を啄む鶏をつかまえて、石垣の端から大空高く放り上げたのである。羽をバタバタさせながら、宙に飛び立つことなく、鶏は下の小道へと落ちていった。

「鶏は、よう飛ばんと」得た結論である。幸い無傷で回収できたので、爺ちゃんには叱られずに済んだ。まあ鶏にしてみれば、とんだ迷惑だったことは間違いない。夕間暮れ、野良仕事から帰った婆ちゃんには、夕餉の支度をしながら必ずラジオをつけた。

「おのれ、猪口才な小僧め、名を、名を名乗れっ」

「赤胴鈴之助だ！」当時大人気だったドラマが流れていたのを、今でも懐かしく思い出す。

翁と媪はよくラジオを聴く。古びたトランジスタ・ラジオ。テレビどころか、確な調度もない部屋の中で鳴るラジオ。流れてくる歌謡曲は、唯一の憩い。ニュースは、唯一の外界との窓口。すでに生活の一部と化している。したがって農作業の合間にも、持ち運び、聴き入っている。そのラジオの調子

が悪くなった。翁はおちこち叩いて、電波の入り具合を良くしようとする。媪は云う。

「あんたと同じでラジオもポンコツだ。そろそろ寿命かね」翁の顔に、苦い笑みが湧く。

——飼っていた牛が倒れた。本編はそこから始まる。

赤牛である。今日はいつものように立って餌を食べているが、肉がげっそりと落ちていたため、頭だけが妙に大きく見える。背骨は尖り、腰骨は突き出ている。

呼ばれた獣医は、歳が藏だから仕方がないという。牛の齢は四十持って一年位だろうとも。翁は困った。自分の元へ来てからでさえ、すでに三十年。長い年月である。働き盛りの壮年から、年老いて動くことさえ儘ならなくなりつつある今日まで、共に一所懸命働きに働き抜いてきた相棒が、いなくなってしまうのである。村の人たちは、翁が九人の子供らを育て上げ、学校を出させ、今日あるのはその牛のお蔭だと、口々にいう。実の子よりも出来がいい、とさえない人もいる。老牛に愛着はある。可哀相だとも思う。だが牛がいなければ、仕事ができない。

翁は、仔を孕んだ牛を買う。若い牛はよく食べる。草刈の仕事が大幅に増えた。若い牛は、年老いた牛に邪険な仕打ちをする。お腹に仔がいるから、食べなければならぬのだらう。餌場から追い出そうとするのだ。老いた牛は嫌が

るだけで、手向いしない。動物の世界も同じか、思わず苦笑しかけたが、これも自然界の摂理か、思い直した。

耕運機に田植え機。韓国の農家にも機械化の波が、押し寄せようとしていた。対するに、裸足で泥田の中に入り、牛に田を耕させ、手で苗を植えていく。翁は機械を頑なに拒み、すべてを手作業でまかない続ける。しかも翁は子供の頃、鍼治療に失敗して筋が縮ってしまったとかで、左足が針金のように細く、杖なしでは歩行も困難なのだ。杖を突いての農作業は、殆ど不可能に近い。だから翁は泥田の中を這いずり回るようにして苗を植え、匍匐して牛の飼料である草を刈らねばならない。なぜそこまでして機械に頼るのを嫌うのか。

農薬についても同様である。農薬を散布する隣家の田と、一本一本雑草を手で抜いていく翁の田のショット。使用すると、牛の餌である草も農薬に塗れてしまう。だから使わないのだと、翁は断言する。だが近在の農家では、疾うに農薬に依存しており、牛の餌は市販の飼料で間に合わせていた。

「農薬を使わないと、米に虫がついて収穫が減る。牛の餌は、飼料でいいじゃないか」うちもそうしよう、媪は言う。

「飼料だと牛が肥って、仔を孕まなくなる」翁は嘯いて、耳を貸さない。

爺ちゃん家でも、牛を飼っていた。  
\*  
短く鋭い掛け声を発しながら、牛に田を耕させていた爺ちゃんの姿が、脳裡にある。

間近で見上げると、ごつごつとした牛の背は、聳え立つ巖のように見えた。だがなぜか黒い牛だったのか、茶色い牛だったのか、明瞭な記憶がない。それでも長い睫の大きな優しい眼と、ときおり涎を垂らしながら、下顎を左右に動かし草を食む姿は、はつきりと覚えている。

牛舎は、納屋の端に設えてあった。柵で囲い、柵と土壁との間一メートル位の場所には、藁が積み上げてあったと思う。爺ちゃんは、その藁で注連飾りを作るのが上手かった。師匠に入ると、母屋の土間の片隅に藁を敷き、その上で作業に余念がなくなる。私は掘り炬燵に潜り込み、器用に動く爺ちゃんの手元を、飽きずに見ていた。年の瀬近くなると、出来上がった大中小様々な大きさの注連飾りを、畚に山のように積んで、街へ売りに出掛けていた。

土壁の横は畑で、その畑の隅に立派な金柑の樹があった。かなり大きな樹である。私は今に至るも、それ程のものを他で見たことがない。かなりの老木だったのだろう。冬休み、私はその樹に上っては、鈴なりに実った金柑を、手当り次第に腕いで食べた。一週間やそこ

らで、食べきれぬ量ではなかった。皮を膚でこそぐようにして、中の酸っぱい部分は捨てた。たまに皮に飽きて、顔を顰めながら中身を食べ、種だけ吐き出す。そのうち唇の端の方が、びりびりと痺れたようになってくる。下の方が疎らになってくると、枝の高い方へ移動である。そこからだと、納屋の土壁の、ほとんど屋根に接した処に切つてある小窓から、牛舎に繋がれた牛の背と、時折蠅を追うように動く尻尾が見えた。その動きが面白いせいもあって、冬の陽だまりの中、私は金柑を齧りながら長いこと眺めていた。

爺ちゃんも、よく沢山の草を刈ってきていた。その草と藁を、昔小学校でよく使っていた紙を纏めて切ることの出来る、基盤の横に鈍のような刃の付いた裁断機の親玉みたいなもので細かく切り、それに米糠を混ぜたものを与えていた。私も何度か手伝ったことがある。

現在家を継いでいる叔父さんの弟が、子供の頃、その裁断機で誤って左手の小指だけ指を切った。爺ちゃんは急いで指をくっつけ、傷の回りに煙草の葉をほぐしたものを擦り、布できつく縛って病院へ連れて行ったそう。病院といつたって、何せ山の上の家である。近所にあるわけがない。何キロも先だ。自動車というのが、希少だった頃のことだ。家にも近所にも、



い。戦争前の話でもある。聞きたくても聞ける雰囲気でもなかった。母の口から、実の父親つまり私の実の爺ちゃんになる訳だが、について聞かされたことは一度もない話したくない、というより、全く話す気もなかったのだと思う。母は「田舎ん爺ちゃん」を、実の父だと思いつまうとしていた。だから母は、爺ちゃんが亡くなるまで面倒を見た。負けん気の強い母のことである。連れ子だから冷たいのだと、人へ後ろ指をさされたくなかった所為もあるのだから、やはり多少の気兼ねはあったのかもしれない。

婆ちゃん、どうだったのだろう。子連れの自分を引き取ってもらったという、遠慮があったのだろうか。それが口数となって表れた。いやいや、人一倍の働き者であること、寡黙であることは、持つて生れついたものだろう。気兼ねはあったかも知れないが、少なくともそれを示す兆候は、見受けられなかった。ただ黙々と、そこそ死ぬ間際まで働いていた。婆ちゃん、爺ちゃんが亡くなった時、爺ちゃんを棺に納まった婆ちゃんの顔を撫でながら、

「長い間ありがとや」涙を流した。爺ちゃんの涙を見たのは、後にも先にもこの時だけである。

翁は頭痛を訴えた。今までにも、何度かめまいや痛みを覚えたことはあったが、これほど激しいのは

初めてである。「頭が痛い」さすがに弱音が出る。翁は意を決して、病院に行くことにする。老牛に牽かせたリアカーに乗り、二人して揺られながら出かける。

街に着くころ、折悪しく雨が降り出した。荷台の上で、二人して蝙蝠を差す。共に場違いなほど派手な傘である。

商店街のアーケードの前で、デモが行われていた。

「狂牛病の進入を許すな。国産牛を病氣から守れ！」

「韓米の自由貿易に反対！」時あたかも二〇〇六年。我が国でも、狂牛病が騒がれた年である。シェンプレヒコールを上げる人々たちを、

翁と媪は、異次元の人間にでも出会った様に、眼を丸くして眺めている。

診察を受ける間、老いた牛は駐車場のフェンスに繋がれていた。その背には、透明のビニールが掛けてある。どこ吹く風といった牛の表情と、何となくの滑稽さに、思わず口元が綻びかけるが、寒いだろうな、可哀相だなという思いが、それを打ち消す。素敵なショットだと思ふ。

診察の結果が出た。血圧が高いのは勿論、体中の至る所が疲弊している、という。

「このまま放っておくと、眼がかすんで、腎臓が悪くなることもあります。やがては卒中や心臓発作を引き起こしかねません」と、医者に威され、

「仕事を続けるのは無理です。休んでください」注意されるが、翁は他人事のような顔をして、聞き流している。

今まで仕事一筋に生きてきた。今更それを変えることなど、出来ない。

「少しでも働く。私はまだ生きている。生きていけるうちは働かないと……」朝は朝星夜は夜星、若い頃八年間作男として働いて以来、翁にとつて仕事は全人生なのだ。休むなど、とんでもない話である。

——病院からの帰路、二人はスタジオで遺影として使える、写真を撮った。

媪は老いた牛を売ろうと、言い募る。

夫は左足が不自由だから、人並みの仕事が出来ない。それをカバーしようとして、牛に頼る。頼りきっている。だから牛の鈴音には耳を敏く、鳴き声には頭痛がひどい時でさえ、すぐに反応する。よく判っている。だが「亭主も牛もポロポロだ」

寄る年波には、抗いようがない。最近牛を操ることさえ、儘ならなくなってきた。牛も昔のようには、動けなくなってきた。そういう自分も、歳なのだ。

「牛を売ろう。私に牛の世話でできないよ」

秋夕という韓国のお盆に、孫を連れて帰省した子供たちに、媪は

「牛を売ろう、父さんを説得して」

「牛を売って、父さんは休め。隠居暮らしをしてくれ。金は俺たちが何とかするから」翁の返事は、無言に無表情。

米の刈入れ時期がきた。しかし翁と媪二人では、刈入れはすでに無理だった。お宅の次男に頼まれたからと、隣家の主人が機械で刈り取ってくれた。この頃、翁の左足が痛みだし、病院へ行く。レントゲンの結果、

「指の骨がズレている。古い怪我だから、治療は無理」この足では、もう米を作ることは不可能なのだ。翁は落胆した。

牛を売ることにする。牛市場へ連れて行く。そこそ肉にでもして売り飛ばそうという仲買が、何人か声を掛けてくるが、言い値に翁は首を縦に振らない。

そのやり取りを聞いている老いた牛の眼から、一筋涙が流れたと見えたのは、私の眼の錯覚であるうか。

結局、牛は売らなかった。心情的に、売れなかったのだ。

帰路、立ち寄った食堂で仲間の一人がいった。

「チェさん、老いばれ牛はあんたが背負う業だよ」

翁は、若い母牛に仕事を覚えさせようとす。だが強情なのか、呑み込みが悪い所為なのか、遅々として進まない。

「時間をかけて教えていけば、何とかなるだろう」溜息交じりに呟くも、当分は老いた牛に頼りしかなかつた。

——老牛に、いよいよ最後の刻が訪れる。倒れたまま起き上がれなくなつてしまつたのだ。翁は何とか立たせようと、鋭い掛け声で叱咤し激励するが、老いた牛はもがきながら、ただ荒い息を吐くばかりである。呼ばれた獣医は、延命の術はない、時間の問題だと、首を振る。「心の準備をして下さい」

じつと様子を見守っていた翁は、黙って牛の首輪を切り取り、付けていた鈴を外す。万感の思いが去来したことだろう。哀しみが堰を切つたように、溢れ出してもきただろう。だが迫りくる死を、どうしてやることも出来はしない。ただ看取つてやるだけである。

老いた牛は、ただ静かに、がくんと首を落とした。しかしながら、生が連れ去られ死が訪れた瞬間、不思議なことだが、あらゆる感情は消える。胸の中を吹き荒れる風は、冷たく乾いて、こもごもの思いを吹き飛ばす。そして、ただ茫漠たる寂寥のみに、押し拉がれるのである。

老牛の亡骸をトラックで運び、シヨベルカーで掘つた穴に埋葬する作業を、翁と傭は共に蹲つて並んで見ている。その目に涙はない。

感情すら拭い取られたような顔をして横殴りの吹雪のシヨットに続いて、牛の墓である土饅頭の上に、うつすらと積もつた雪。

似たような経験が、私にもある。時期のズレはあるが、十六年生きた愛犬と、十八年という長寿を全うした愛猫を亡くした時である。愛犬は、終日哀しそうな、か細い鳴き声を上げながら、死んだ。看取る者は、体を摩つてやるぐらいのことしか出来ない。愛猫は、最後は癌を患い弱つてきたので、座布団に寝かせておいたのだが、気が付くとすでに息をしてなかつた。共に家族で埋めた。野良犬に掘り返されないよう、息子に深めに掘らせた穴に、タオルケットでくるんだ亡骸を横たえる。一瞬まだ生きていたのではないかと、タオルケットを捲り触つてみる。だが四肢は冷たく強ばり、目は光なくただ虚無を映すのみ。死を確認すると、改めて包み直し、土を掛けていく。

私は涙もろい人間である。だが、どちらの場合も涙は出なかつた。ただ冷たく乾いた風が、渦を巻いて体の中を吹き抜けていっただけだ。思考力は停止している。翁も私も涙を流さなかつたのは、いくらか家族同然だったといえ、死んだのが動物だったからということではなく、おそらくだが、やがてはそう遠からぬ日に、自分たちも冷たい骸と化して葬られるのだと

いうことを、理屈ではなく肌で感じ取つたが故、だと思ふ。

「その内、俺もそちらへ行く。その時は、また一緒に遊ぼうな」土饅頭を、立ち去り難く見詰めるが、胸の中でそう呟いた。

母の実家で牛を飼っていた。誰にでもある訳ではない、謂わば特殊な事情が、私をして必要以上に、『牛の鈴音』にのめり込ませたのかもしれない。

一歩退いて、そのことを首肯しつつも、尚それでも私は幼少頃の記憶を、ほろ苦くも懐かしい思い出として、大切な宝物のように思つている。それは事実だ。しかし私を、実の孫ではないにもかかわらず可愛がつくれた爺ちゃんも、穏やかな笑顔の婆ちゃんも、今はもういない。私自身還暦を過ぎ、日々の些事に忙殺され、次第に思い出すことも、稀になつていふ。記憶力も衰えを見せている。偶に思い出しても、断片でしかないようになつていた。

それがこの映画を観た途端、思い出がまるで洪水のように、押し寄せてきたのである。それも細部に至るまで、鮮明な映像を伴つてである。これもまた事実なのだ。嗚呼、私にはこんなにも伸びやかな子供時代の経験があつたのだ。更なる驚きであつた。

牧歌的な佇まいは、私の原風景。接した動物たちは、生命の息吹を教えてくれた先生。良くも悪くも

今の私は、この幼少期に、根差している。

生きてきた過去よりも、余生を数えた方が手つ取り早くなつた現在、願うのはイ・チュンニョル監督の、一切の感情も煩惱も浄化した、更には死をも包含した透명한視線を持ちたい、ということだけである。

『牛の鈴音』に出会えたことを、私は心から嬉しく思う。そして監督には、やはり大いなる感謝を捧げるべきだろう。

ここで映画の冒頭に戻ろう。清涼寺の急な石段を上り、詣でるふたり。老いた牛が死んだ、翌年のことである。参拝が終わつた後、傭が問う。「牛が恋しい?」

「何たつて?」と翁。

「死んだ牛が、哀れかい」「いくら牛でも死ねば哀れさ。だが済んだことだ」そう、済んでしまつたことなのだ。慥然と答える翁の声に被せて、死んだ牛が首に付けていた鈴のアップに切り替わり、そしてタイトル。鈴の音。

私が中学校に上がる頃には、「爺ちゃん家」の牛はすでにいなくなつていた。三方を土壁で囲まれた薄暗い牛小屋の、小さな高窓から差し込む日の光に照らし出された、主のいない空間は、ただがらんとして見えた。

あの牛は、どうしたろう……

## 心筋梗塞顛末の記 久保嘉之

一昨年の暮れに、心筋梗塞の発作を起こしたが、我慢できない痛みではなく、その前に逆流性食道炎を患い、丁度治りかけた頃合でもあったので、多分再発したのだろう位にしか認識していなかった。症状もよく似ていたのである。当然、昨年春の健康診断で引つ掛かった。以来一年程投薬治療を続けてきたのだが、

「このままでは悪くもならないかわりに、決してよくもならないよ」。担当医の勧めもあり、紹介状を書いて貰って、房総半島の略真ん中辺り、山の中にある循環器病センターで、心臓のカテーテルを用いたステント手術を受けたのが、今年の三月。経過は良好で、十日足らずで退院できた。だが世の中そんなに甘くはない。本当の試練は、退院の翌日に早速やってきた。

——昨夜は早く寝たのに、なぜこんなに首が凝るのだろう。などと思っている内、凝りは肩から背中に広がり、すぐに激烈な痛みに変わった。息子に救急車を呼ぶように頼むと、循環器病センターの担当医にも連絡するよう命じた。だがまともな判断ができたのは、

そこまでだった。何しろ痛みが半端なく、イスラムの礼拝スタイルが、唯一痛みを拮抗できる手段だったのである。

私の状態を観た救急隊員の判断で、ドクター・ヘリが要請された。私の家から循環器病センター迄、車で一時間二十分程。救急車でも五十分近くかかる。多分そんなには、持つまい。普段患者以外の付き添いが、いくら身内といえどもヘリに同乗することは、許されていないという。それなのに息子が、パイロットに簡単な注意を受けただけで同乗できたのは、私の様子がいかに切迫していたかという証しであろう。

後で看護士さんに聞いた話では、あまりの痛さに気を失う人もいるらしい。私もそうだったら、どんなに楽だったろう。だが意識は最後まではつきりしていた。ヘリに乗せられてから到着する迄の間に、それぞれ二度、ニトログリセリンの口中噴霧と、女性の救急医は確かに麻薬と呼んでいたが、手の甲にモルヒネの注射を受けた。だがどちらも、殆ど効果はなかった。人間というのは、おかしなものである。どんなに辛抱堪らぬ痛みでも、間欠性はある。ほんの僅か

な間痛みが薄らいだ時に、折角へりに乗ったのだから、下界の景色を眺めてみたいいな、そんなことを思ったのを覚えている。

病院に着いてから検査を受ける迄にも更に、ニトロの噴霧とモルヒネ注射を受けたが、結果は同じ、気休めにもならなかった。

検査室から運び出されると、勤め先から駆けつけた家内と息子が立っていた。

「心配かけて済まん」。私はそれだけ言うのがやっとだったが、これも後で聞いたところによると、二度目の発作だし、多分助からないでしょうから、最後にお顔を見てあげておいて下さいと、家内は医者から引導を渡されていたという。

二度目の手術の記憶は、体がカーッと熱くなる程ニトロが投与されたことと、最初の手術でステントを入れた箇所が入り口が、血栓で塞がれるであろう予測は不可能に近いという担当医の言い訳と、大分治まりはしたものの消えぬ背中の痛みであった。そしてその痛みは、翌日の夜半迄続いた。

術後、CCU(集中治療室)——循環器科では、こう呼びます)に運ばれてからも、苦難は続いた。

何しろ寝返りが打てない、身動きがとれないのである。右股の付け根からカテーテルを入れたので、特にその部分を動かすと血栓が生じやすい。血栓ができると、今度こそ一巻の終わりである、ということ、担当もえらく慎重であった。

それにしても、寝返りが打てないということが、こんなにも責め苦であろうとは、思いもよらなかった。

「動かないで」。そういわれてもなア。私は半ば自棄で、足をベッドに縛り付けてくれと、頼んだ。そんな状態が、十二時間以上続いたのである。

流石に、今回は簡単には退院させては、くれなかった。

——近況報告に、やたらと頁を使うんじゃないと、お叱りを受けそうなので、これでやめますが、興味のある方が多い場合に限り、続きは次号にて。

皆様方もくれぐれも、健康管理にはご注意ください。

◇ ◇

## 本気で気に入りました!

『レ・ミゼラブル』

藤井陽子

## アン・ハサウェイが散切り頭

世の中のありとあらゆる事に疎い私。世界文学とか世界的な文豪とか、こういったものにも例外なく疎い。基本読書に親しまない人間なので、「レ・ミゼラブル」の原作すら読んだ事はなく、ヴィクトル・ユゴーに関しては名前しか知らない。

そんな私が、なぜこの映画を観たいと思ったのか。

それは、テレビでこの映画のCMを見た時の事。アン・ハサウェイが、散切りのベリーショートになって、痩せこけて、泣きながら

歌っていた。あのキレイで可憐なアン・ハサウェイがボロボロだった。彼女のそんな姿を見て、何かただならぬ気配を感じた。

レ・ミゼのCMは、可愛くてキレイで可憐なアン・ハサウェイのイメージを大きく変えるもので、女優として分厚く脱皮した印象を瞬間的に受けた。なんでしょうかね。とにかく、アン・ハサウェイが見たくて、この映画を観に行つたようなものでしょうか。

熱心なレ・ミゼファンから叱られそうな前置きは横に置いて、真面目に感想を書きますよ。

我慢できずに、恥ずかしげもなく最初に書いちゃいますけど、私は何年かぶりに映画を観て号泣しました。それはそれは滂沱(ほうた)の涙を、嗚咽しながら流しました。

それと、映画を観た後、小学生の娘にお願いして学校の図書館から原作(上・下)を借りてきてもらい、大作なのにこの私がつるつると読みふけり、そして号泣しました。映画の効果は絶大ですね。

この映画は、どうやらレ・ミゼのミュージカルをほぼ忠実に映画化したものようです。調べてみたら、1985年にロンドンでの初演を皮切りに、27年以上も上演

され続けている超有名なミュージカルだそうです。youtubeで10周年記念のミュージカル見ましたけど、素晴らしいですね!

さて、この映画の監督は、「英国王のスピーチ」(未見)のトム・フーパー。基本忠実にミュージカルを再現した形で映画化にしつつ、ミュージカルにはないオリジナルの曲「Suddeeny」(突然)もあつたりする。

主な配役の説明をしますと、ジャン・ヴァルジャン役にヒュー・ジャックマン。ファンティーン役がアン・ハサウェイ。ジャベール役にラッセル・クロウ。子役コゼットにイザベル・アレン。大人コゼット役がアマンダ・セイフライド(「マンマ・ミーア!」でメリル・ストリープの娘役をしていた人だとすぐにわかりましたよ。キレイで可愛いです☆)。

あとは、コゼットを預かっていた宿屋のテナルディエ夫妻の妻役にヘレナ・ボナム・カーター(この人、私の大好きな映画「チャーリーとチョコレート工場」にチャーリーのお母さん役で出てましたね☆ティム・バートン監督の奥様なんですわ)。宿屋の夫婦は、原作と違って映画とミュージカルの中

ではコミカルな立ち位置です。コメディ担当です。それと、その夫婦の娘のエポニー役にサマンサ・パークス(エポニーヌの印象としては、あの極悪夫婦に育てられたのによくこんないい子に育つたなっけ感じですかね)。

映画では、ミュージカル同様歌で展開されてましたが、皆、演技しながら歌を歌って単純に凄いなと思えました。歌もそこそこ面白いし。なんととっても、全編、曲のなんと秀逸なこと! 全く、本気で気に入りました。(映画も本家ミュージカルも、こんなに違和感なく楽しんで観られる私は、意外にミュージカルが大好きなのではないかという新たな発見です)

## 号泣に次ぐ号泣

ところで、ジャン・ヴァルジャンって、1個のパンを盗んだ罪でトータル19年間も牢獄に入れられてたんですね。他の囚人達も、どうでもいいような事で捕まっていた様子で、なんて時代だったんだろううって寒気がしました。

しかも、冒頭の巨大な船を囚人達が曳くシーンにも象徴されているように、やってもやっても何ともならない無意味なような事を、

監視のもとで死に物狂いで毎日毎日やらされるなんて、凄まじい拷問みたいですね。まさにここでも「レ・ミゼラブル」。惨めなる人々。ああ、無情。

ジャン・ヴァルジャンは、囚人No. 24601。名前で呼ばれる事もなく、他の囚人同様に人権ゼロって感じです。釈放後も、ヴァルジャンを執拗に追い続けるジャバール警部のジト目がウザいです。

ヴァルジャンは、その後、市長さんになったのです。市民の為に心と行動を尽くす、誠実な市長さん。

ところで釈放後すぐ、食べさせてくれる人や泊めてくれる家を転々と探していたヴァルジャンですが、どこにいても元囚人には厳しいわけです。そんな中、修道院の司教が手を差し伸べてくれたわけです。温かい食べ物と、ベッド。しかし、一晩泊めてもらった彼は、司教が大事にしていた銀の食器類を盗んで夜明け前に逃げ出してしまふのです。19年の牢獄生活が、彼を人間不信と卑しさ一杯の生命状態にしてしまったのでしょうか。窃盗の罪で再び警察に一旦は捕らわれるヴァルジャン。ところが

そこで、司教がこう言うのです。

「いえいえこれは私が差し上げた物です。この銀の燭台も差し上げたのにお急ぎだったから忘れたのです。さあ、どうぞ」(だいたいこんな感じ)

ヴァルジャンはこの時、想定外の司教の慈悲に衝撃を受けると共に、一つの大きな決意をするのです。「私は、生まれ変わるのだ!」と。「正しい人間になるのだ!」と。

原作で詳しく知りましたが、このシーン、「あなたが正しい人間になる事を約束したからこそ差し上げたのです」という司教のささやきが、そのままヴァルジャンに対して決意を促したとも言えますね。「ジャン・ヴァルジャンは死んだのだ(もういない)!もう一つの物語(人生)が始まるのだ!」と歌っていたかと思われます。

それは、一人の人間による生命がひっくり返るほどの「革命」の始まりだったのです。これを、「人間革命」とでもいうのでしょうか。私はこのシーンで、まず第一の号泣だったのです。そう、私は、他人の本気の大きい決意に弱いのです。心の琴線に触れまくるので。

ヴァルジャンの偉大な決意。そ

の決意を胸に、そして決意のままに、ヴァルジャンは相当の苦勞と努力の末、市長にまでなったのでしよう。でも、身元・素性・過去は隠したまま。名前はマドレーヌに変えて、市長として、日々市民の為に尽くす至極善良で優秀で聡明な人間になったのです。

ある日、市長傘下?の工場で働いていたファンティーヌが同僚から嘘の告発をされてクビになりました。最終的な判断を市長に委ねることとなり、しかし実は市長本人の知らぬ間に「市長のご判断だ」と強引にクビにされ、ファンティーヌは路頭に迷います。

彼女は元々、一人娘のコゼットをテナルディエ夫妻に預けてパリに来て、夫婦に送金しながら仕事をしていた身。金儲けに余念のない夫婦にさんさんお金をむしり取られていく訳ですが、娘の為に信じて疑わないファンティーヌは、身を粉にして働いて送金をこなしています。そんな中でクビになる事が何を意味するのか。

どうしてもお金が必要なファンティーヌは、長く美しい髪の毛を売り、白く美しい歯を売り、身心ともにボロボロになります。

そしてその時代、仕事と信頼を

失くした女性が行き着く道・・・娼婦にならざるを得なくなった彼女は、その後も過酷な生活を強いられます。環境も栄養もすこぶる悪い中で、ファンティーヌは当然体調を崩してしまいます。

そんな時、1人の客の男といざこざがあり、男の嘘の告発によりファンティーヌはジャバールに逮捕されてしまいます。長期の投獄を言い渡された彼女は、娘の存在とお金が必要な事を必死に訴えます。しかし情け容赦ないジャバール。

そこで、市長であるヴァルジャンが駆け付け、病気の彼女を病院に連れて行くと訴えます。そしてその場で、過去に工場で会った記憶と、自分のせいでクビになっていた事を知ったヴァルジャンは、ファンティーヌの為に生涯をかけて出来る限りの事をしようと考えます。

診察の後には修道院で長期の療養をさせ、娘コゼットを探し始めます。

しかし、ファンティーヌの体は日々悪化し、回復することなく結局命が尽きてしまいます。最期は、コゼットの幻覚を見て、苦しみながらも幸せな気持ちのまま息を引



イラスト・藤井陽子

き取ります。(ここ、原作ではかなり過酷なシーンが描かれていて、ヴァルジャンを追いつけるジャベールが遂に二人のいる修道院に押し掛け、ジャベールの姿を見たファンティエヌがショックのあまり発狂したまま死んでしまうという描写なのです)

またちなみに、売った歯は映画では奥歯となっていていますが、原作では前の歯2本。そのせいでファンティエヌは見た目がかなり老けてしまったと書かれています。

でも、映画ではあの最期の描き方で正解だったと思います。ファンティエヌの人生、あまりにも救いようがなく思えるので、最期は幸せな気分でもなくなって、少しでも安心できるのです。とはいえ、母親としてのファンティエヌの無償の深い愛を目の当たりにして、第二の号泣だったのです。

ヴァルジャンは、亡くなる寸前のファンティエヌとある約束をします。娘コゼットを彼が引き取り、何不自由なく責任を持って育てる事。それを聞いたファンティエヌは、遠のく意識のままとも喜びます。

その約束を果たすべく、ヴァルジャンはコゼットを探し出し、極悪のテナルディエ夫婦から引き離し、養父となつて育てるのです。

ちなみに原作では、ファンティエヌが亡くなった直後ヴァルジャンが彼女の耳元で何かをささやくと、死んだファンティエヌの口元がかすかに微笑んだと表現されています。(後に、その時のささやきが前述した「約束」

の内容だった事がわかる展開になっています)

ここまで、長々とストーリーを追っている感じになっていますが、原作もミュージカルも知らなかった私なので、ついつい説明たらしくなってしまいます。でも、恐らくストーリーを知っている人の方が多いと思うので、ここからは、かなり抽象的にはしよつつ書こうと思います。

### 戦う者の歌が聞こえるか？

まずヴァルジャンですが、マドレーヌ氏としてコゼットと慎ましく生活している最中、ジャン・ヴァルジャンとして捕らえられた一人の男が現れ、自分の素姓を告白するの黙っているのか、葛藤で苦しみます。言えば大勢の雇用者が路頭に迷うが、黙っていれば何の罪もない一人の男の命を奪う事になってしまう。

その時、正しい人間になる、生まれ変わると決意した自身の信念を貫く事を選択します。そのため、三度ジャベールに追われる日々に突入するのです。

一方、美しい娘に成長したコゼットは、年頃になり、フランス革命の中心的人物の一人であるマリ

ウスと恋に落ちます。

そして、そのマリウスに一途な片思いのまま革命の中で命を落としたエポニーヌ。

それから、革命の若者部隊に入り込んだジャベールは、スパイ行いがバレて殺されそうになりますが、なんとヴァルジャンに助けられます。それによりジャベールは、今までの「法こそ正義」として生きてきた人生に生まれて初めて葛藤を抱きます。追いつけてきた男に命を救われてしまった事が、大きな苦悩の始まり。捕らえるべき男を捕らえられなかった上に、その男に生かされた自分の命に価値があるのかないのか悩みます。その男は、人間として正しい事をしたいと願っている。法が正義なのか、人として正しい道が正義なのか。揺らぐ信念。追いつけた男に今や追われる彼の心。ヴァルジャンの世界から逃れたい。・・・そして彼は、あつけなく自ら命を断つてしまうのです。

さて、コゼットとマリウスは、多難を乗り越え結婚します。ヴァルジャンは、彼氏だった頃のマリウスに対して、父親ならではの苦悩も抱いたりします。可愛い大事な娘が取られてしまうような感覚。

嫉妬に近い感覚。そんな感覚を抱くのはおかしいと気付いていても結果彼は、努力もあって、マリウスもコゼットと同様に心から大事な存在だと感じられるようになります。

そして、ヴァルジヤンは、終盤、自分の命が長くない事を悟ります。マリウスとコゼットに、自分のしてきた事、自分の人生を、全て告白します。二人はヴァルジヤンに最大に感謝し、死んでほしくないと涙を流します。

ヴァルジヤンが息を引き取る瞬間に、ファンティースが現れます。穏やかな笑顔のファンティース。私の娘を育ててくれた。約束を果

ブックエンド

興味深い裏話の数々  
「シネマの極道 映画プロデューサー一代」(下部五朗)

東映やくさ映画のプロデューサーといえ、俊藤浩滋がこの本の著者である。下部五朗は、138部がプロデュースした作品は、3部が本にのぼる。『日本侠客伝』『緋牡丹博徒』『仁義なき戦い』『山口組三代目』『日本の首領』『極道の妻たち』『鬼龍院花子の生涯』など、数々のヒット作を生み出した。映画は監督のものとして語られることが多い。映画は大勢の人やメラなどいづれ、人も無視できない。ここに、もう一人登場する。

たしてくれた。今あなたは最愛の二人の子供たちに看とられながら人生を終えようとしている。素晴らしい一生だった。ファンティースは優しく慈悲深くヴァルジヤンを包み込み、安心して彼は旅立ちます。ここで、これでもかと第三の号泣だったのです。

結局、この映画を通してほとんど泣いていました。自分で言うのもなんですが、深い涙だったと思うのです。一人の男の人間革命と、運命を自分の力で切り開いた力強い蘇生の物語に、涙なしには観られなかったのです。

ヴァルジヤンの命の革命と蘇生には、司教の存在、ファンティース

プロデューサーである。企画を立てて俳優を決め、脚本家、監督を決め、クラクインさせる役割を担っている(さらに、社長承認も企画を通すうえで、関係者として存在する)。それぞれの立場から、いい映画をつくるために歯に衣着せぬ発言をする。遠慮はしない。丁々発注。こうしたつげりあいが映画を面白くさせたのだらう。

「日本の黒幕」という映画では、大島渚に監督してもらおうと脚本を見せた。大島は脚本を読んだ機の上、高田宏治の目の前で脚本を辛抱した。大島が大人げないのか、田評くはかくも厳しいのか、作品となのか(結局大島は監督を降りた)。下部が気に入っていた。海

又の存在、コゼットの存在、テナルディエ夫妻の存在、ジャベールの存在・・・様々な命との関わりの中で成し遂げられたものだと思います。司教のように菩薩の命の者。ジャベールのように修羅の命の者。テナルディエ夫妻のように餓鬼の命の者。ファンティースのように、母親としての愛情を普通に持ちながらも常に地獄の思いで生きてきた者。

この映画の中の様々な命が、それぞれの人生を生きて、ヴァルジヤンに影響を与え、与えられ、触発し合い、「命のレベル」を変えていく。そんな風にも感じました。最後に、フランス革命のさなか

燕ジョーの軌跡の脚本(松田寛夫)を主演の松田優作に見せたところクソミソにけなし、なじみの脚本家は許さないと主演を降りてしまった。結局、松田の主演は実現しなかった。『鬼龍院花子の生涯』の原作を持ち込んだのは梶芽衣子。むしろ、下部を志願したのは梶芽衣子。しかし、下部は年齢を理由に梶を辞退させ、夏目雅子を用いて大ヒットに導いた。梶芽衣子主演だったらどうだったろう。

「影の軍団」がストーリーでは、主演の千葉真一がストリーパーから出演までアイデアを出しまくるのでこじれてしまっ、結局千葉は怒って降りてしまった。俳優が渡瀬恒彦から出て来たことはよくあるらしいの

の「民衆の歌」が流れます。「戦う者の歌が聞こえるか？」という歌詞に、「聞こえる！」と心の中で応えました。歌詞の中に「Ever yman will be a king」とあります。「誰もが自由を手に入れられる」という訳詞でしたが、「誰人も、キングになれる。自分の人生の中で王者になれる。人生の中で最後には必ず勝利できる」・・・私には、そんな風に思える歌詞でした。

どこまでも「人間」と人間の「生命」を描いた、そしてジャン・ヴァルジヤンという男の壮大な「生命の変革」の物語であったと結びたいと思います。

だが、それにも限度があるということだ。映画は誰のものかというせめぎあい。1983年、今村昌平監督『山節考』はカンヌ映画祭でパルムドールのメリークリスマスだった。大島渚監督以下スタ入り、キャス対して大挙してカンスタ入り、これに女優の坂本スミ子、下部と主演女優の坂本スミ子の二人で初演。大島渚を呼んでつづつ『天草四郎時貞』に進行主任としてつづつたことがあった。大島とは浅からぬ縁があつたのだ。映画界の裏話は興味があつた。この本もそうした裏話が満載で楽しめる。(流漂介)

# 反戦、反核、生と性

映画職人・新藤兼人が遺したもの  
(下)

今市文明

新藤の反核主義はその後も揺らぐことはなかった。1954年に西太平洋ミクロネシアのビキニ環礁で日本の延縄漁船・第五福竜丸がアメリカの水爆実験による死の灰を浴び、その乗組員が原爆症となり、無線技師だった久保山愛吉さんが亡くなるという大事件が起きたが、彼はいち早くこれを映画化した。この事件をドキュメンタリータッチで描いた『第五福竜丸』(1959年)である。

さらに後年、1988年には『さらけ隊散る』も撮っている。これも、戦時中の移動劇団「桜隊」が広島で被爆し、9人の劇団員が犠牲

になったという実話を映画化したもの。実際にその劇団員たちと交流のあった映画や演劇関係者らの証言を絡めた記録映画的な装いをとっているが、団長の丸山定夫、

戦前のヒット作『無法松の一生』でヒロインを演じた女優・園井恵子らが体中を走る高熱に苦しんで狂い死にする様を克明に描写し、原爆の恐怖を強烈に告発している。

『原爆の子』が完成した直後、『愛妻物語』で運命的な出会いをした乙羽信子と新藤は、ついに男と女の一線を越えたという。新藤40歳、乙羽28歳。以来、2人は「乙羽さん」「先生」と呼び合って、生涯を共にすることになる。

「わたしは妻とは別れようとは思わなかった。妻も子どもたちも、わたしは家を守りたかった。乙羽さんとの関係が続けながら、逗子の家へ帰っていた。妻の前では、乙羽さんのことは暗黙の了解というこで押し通した」(『いのちのレッスン』より)と、新藤は自著で赤裸々に述べている。

やがて、2人の子どもも成人。新藤が60歳のときに妻から別れを切り出され、妻の要求どおりに財産を等分に分けて離婚。その5年後、妻が病死。1年後に新藤と乙

羽は正式に結婚した。新藤66歳、乙羽54歳のときだった。

## 起死回生となった『裸の島』

さて、監督第一作の『愛妻物語』は大映との提携作品で資金面、配給先にも恵まれたが、『原爆の子』からはすべて自主製作となった。ということは、資金の調達から上映の手配まですべて自前で行なう必要がある。

近代映協設立から約10年。この間、新藤は15本の映画を精力的に撮ってきた。なかには、貧しさから芸者に身をやつした1人の女の一生を描き、乙羽が初めての汚れ役に挑んだ『縮図』(1953年)、終戦直後の鶴見の湿地帯を舞台に、そこで生きる底辺の人間模様を描いた『どぶ』(1954年)、戦争未亡人など戦争がもたらした貧困から抜け出すために、郵便局の現金輸送車を襲撃しようと思いついた男女5人の哀れな末路を描いた『狼』(1956年)など、社会性のある秀作も多い。

しかし、戦後の貧しさにあったこの時代、国民はそれを直視させられるような映画には目を向けたくはなかった。原爆の2作についても、記憶がまだ生々しかったた

めに、あえて観ようという人が多くはなかった。しかも時代は「もはや戦後ではない」と言われた高度成長期にさしかかる頃。映画も娯楽作品が大いにもはやされた時代であった。

そんなことから興行成績は振るわず、近代映協は財政的にジリ貧となり、いよいよ終わりという崖っぷちにまで追い込まれた。そして、これが駄目なら解散の覚悟で、最後の賭けに出て撮ったのが『裸の島』(1960年)である。

瀬戸内海の小島にプレハブを建て、わずか13人のスタッフが合宿形式でつくりあげた。当時、映画1本を撮るのに5000万円が必要と言われていたが、その十分の一の最少予算で臨んだものだ。スタッフが寝る貸しふとん代にも窮する有様だったという。

映画は、殿山泰司、乙羽信子の夫婦が水道も井戸もない瀬戸内海の離れ小島の段々畑で農業を営んでいる。夫婦の日常は、内地から水を汲んでは舟で運んできて、畑に水をやるということだけ。これを、なんと全く台詞なしで見せるという実験的な作品である。が、観客には殿山と乙羽の顔から流れ落ちる汗、水桶の天秤棒が肩に食

い込む様を見て、人間が生きにくいことの崇高さを教えられる。私も初めて観たとき、思いがけず心が揺さぶられた記憶がある。

『裸の島』を撮り終えた新藤は、すぐに配給先やスポンサー探しに奔走した。このとき、笑えないこんなエピソードがある。

小さな配給会社から上映してやるとの連絡を受け、喜び勇んで映画を見せたら、「なんだ、ピンク映画じゃないのか」と即座に断られた。そのタイトルから、相手はピンク映画と勘違いしたのだ。また、ある電機会社からスポンサーになつてもよいとの一報を受け、早速、重役たちに映画を見せたところ、上映中、全員の重役たちが去つていつてしまった。そのタイトルから、涼しげな環境をテーマにした映画だと思い、当時、販売競争が激化していた自社の扇風機のイメージアップにつながると期待したからだというのだ。

ところが、この作品がその年のモスクワ国際映画祭でグランプリに輝いたのだ。まさに、新藤にとつては青天の霹靂だったが、これにより世界各国からこの作品を買いたいとのオファーが殺到し、最終的に当時の金額で4000万円

もの総収入を上げることができた。これで、それまでの借金と製作費など経費の一切合財を返し、さらに次回作のために使える1000万円が残るといふほどの利益を生み出した。まさに『裸の島』は起死回生の1本になったのだ。

以後、新藤は国内外で名声を得、その力をバックに以前にも増して精力的に映画づくりに取り組んでいった。しかし、独立プロの道は相変わらず険しい。

「1本映画を撮り終わつて、満足に浸りのんびりしていると、誰かが映画を作りませんか、と誘つてくれるわけではない。失敗すればそのあとがない。これが最後の映画になるかもしれない、という断崖絶壁に立たされた思いで映画を撮ってきたことが、結果としてわたしたちの力になった」(『いのちのレッスン』より)と新藤は述懐している。

#### 問題作と社会派作品を連発

『裸の島』は新藤監督48歳の作品だが、それから30年余、80歳までの主な作品から彼の足跡をたどつてみよう。

・『人間』(1962年)：偶然、漁船に乗り合わせた4人の男女。

嵐に見舞われ漂流。食糧も尽き、飢えと渴きで死の不安にさいなまれる。そして、肉食の妄想に駆られた1人の男が若い男を殺す。

それを黙って見ている女。船長だけが生を信じて耐えている。やがて、大型船に救われるも、殺した男は罪の意識にさいなまれ、海に飛び込んで自殺、女も狂い死んでしまう。生き残つたのは生をひたすら信じた船長だけだった。極限状態にさらされた人間の姿を追求した衝撃の問題作。

この作品で、それまで脇役ばかりを演じてきた殿山泰司が船長役に扮して初めて毎日映画コンクールの主演男優賞に輝いた。

・『母』(1963年)：新藤の長兄は刑事をしていたが、50歳を過ぎて突然離婚、九州に流れて淋しい人生を送つたという。この作品は、その実話を伏線にしたもの。離婚した妻は、幼い子どもを愛情深く育てるものの病気で死なせてしまう。そして、小さな工場を経営する在日朝鮮人の男と再婚、新しい生命を宿して、再び希望を持つて生きようとする。子を思う母の尊さを描いた作品。

・『藪の中の黒猫』(1968年)：戦乱の世、落武者に暴行され殺

された母娘が妖怪となつて、色仕掛けで次々と武士に復讐する話。母親役は乙羽だが、娘役の太地喜和子が濃厚な濡れ場を演じ、日本映画製作者協会の新人賞に輝いた。

乙羽も毎日映画コンクール主演女優賞。生の根源である性を見つめた作品。

・『裸の十九歳』(1970年)：実際にあった連続射殺事件に材をとり、青森から集団就職し、母との別れなどつらい青春を送つた19歳の少年の生い立ちをたどりながら、犯罪にいたるまでを描いた社会派ドラマ。少年を演じた原田大二郎が日本映画製作者協会新人賞を受ける。

・『わが道』(1974年)：青森から出稼ぎに出た夫が行き倒れて、勝手に解剖実験されたことに怒つた妻が警察権力を相手に裁判闘争で闘う様子を描いた、これまた社会性の強い作品。

・『ある映画監督の生涯・溝口健二の記録』(1975年)：新藤が師と仰いだ映画監督・溝口健二の生涯を、監督と縁の深かった田中絹代など大勢の関係者の証言をもとに浮き彫りにした作品。キネマ旬報ベストテン第1位に輝いた。

・『竹山ひとり旅』(1977年)

：盲目の津軽三味線奏者・高橋竹山の若き頃を描いた作品。3歳のときははしかがもとで失明した竹山は、三味線を習得し、それを唯一の友として風雪の東北地方を1軒1軒外付けして歩く放浪の旅を続ける。その歯を食い縛って生きようとする強靱な生命力が津軽三味線の第一人者を生んだという感動作。毎日映画コンクール優秀賞。

・『絞殺』（1979年）：家庭内暴力の末に、父親が息子を絞殺してしまうという、当時の社会問題を扱った作品。

・『北斎漫画』（1981年）：葛飾北斎と滝沢馬琴の交流を長い年月にわたって描く。北斎は90歳で亡くなるまで春画を描いていたといい、年を重ねるほどに若々しい作品を残した。「あと10年ほど生きられれば、本当の画家になれたのに」と語ったといい、新藤はその生き方に共鳴し、自らの目標にしたという。北斎の妻を演じた田中裕子がブルーリボンと日本アカデミーの助演女優賞に輝いた作品。

・『ブラックボード』（1986年）：偏差値教育のひずみがイジメを生み、殺人事件を引き起こす。当時の教育問題を扱った社会派作品。

・『墨東綺譚』（1992年）：小

説家・永井荷風が60歳を前にして初めて理想の女性と出会い、娼婦である彼女との官能的な生活を描いた作品。日本的な官能美が目された。新藤監督が日本アカデミーの最優秀脚本賞に、荷風を演じた津川雅彦が主演男優賞に、乙羽信子が助演女優賞に、娼婦を演じた墨田ユキが新人賞にそれぞれ選ばれた。

乙羽に捧げた『午後の遺言状』

1993年の夏。乙羽信子は肝臓ガンの手術を受け、夫である新藤に医師は「余命は1年から1年半」であることを告げた。このことは本人には告げず、新藤はどうしたら、その1年か1年半を乙羽が豊かに過ごせるかだけを考えて。そして、結論は「自分と映画を撮るしかない」ということだった。思えば、初めての出会いから42年間苦楽をともにしてきた同志である。映画を撮ることでは、彼女の最後は飾れないと考えたのだ。

こうして生まれたのが『午後の遺言状』（1995年）である。

杉村春子扮する老女優が1週間の休息のため、蓼科の別荘にやってくる。別荘を管理しているのは山麓に住んでいる6代の主婦(乙

羽信子)。この2人と友人である年輩いた能役者夫婦を中心にコソ泥事件などを絡ませながら、老人たちの温かな日常が淡々と綴られる。が、老女優と管理人の間にはある秘密があり、認知症の恐怖から能役者夫婦は新潟の海に入水……。

新藤自身80歳を超え、杉村春子は当時86歳、乙羽も70歳になるうとしていた頃で、高齢者のさまざままな生き方を描こうというのがこの映画の狙いだった。

乙羽はロケ地の信州蓼科から1週間ごとに東京へ戻り、病院で抗ガン剤などの治療を受けてはまた撮影に戻るといふ過酷な日々だったが、それを平然とこなし、寿命を宣告されてから1年を過ぎた頃に撮影されたラストの新潟の海辺の場面では39度の高熱だったにもかかわらず、気力を振り絞って見事に演じてみせたという。まさに、女優・乙羽信子は命の燃焼を果たしたのだ。

そして、乙羽は完成前のラッシュフィルムを見て満足した表情を浮かべ、その年1994年12月に永眠した。享年70。

新藤は「もし撮影中に乙羽さんが死んだら、映画は中断しなければならなかったが、それほどの犠

牲を払っても悔いはない。乙羽さんは、私にとつてそういう存在なのだ」と、のちに語っている。

この作品は、1995年の日本アカデミー賞、キネマ旬報ベストテンなど国内各賞のグランプリに輝くとともに、新藤は最優秀脚本・監督賞、杉村は最優秀主演女優賞、乙羽は最優秀助演女優賞や特別賞に輝いた。

82歳で妻に先立たれた新藤は心底参ったという。「部屋であぐらをかいて、じつとして、ただひたすら孤独を受け入れた」そうだ。が、やがて自分には乙羽さんがついていると思えるようになり、寂しさも心地よい寂しさにならわっていった。最初の妻・久慈孝子の「あなたは一生涯シナリオを書き続けるのよ」のことは、そして最後の妻・乙羽信子とともに映画を撮り続けてきたこと、このことに鞭打たれるようにして、自分が生きることが映画を撮ること」だと再認識するに至ったのだという。

赤坂のマンションで1人暮らしとなった新藤は、いつまでも元気で映画を撮りたいとの思いから、毎朝ラジオで英会話やロシア語を勉強し、家の近くを数十分かけて散歩するのが日課となった。英会

話などはシナリオに生かすためであり、散歩は文字どおり健康を維持するためである。こうした生涯現役で生きるための努力は、高齢社会に生きるたくさんの高齢者のすぐれたお手本にもなった。

『午後の遺言状』から4年後、再び高齢者問題をテーマにした『生きたい』(1999年)を公開した。

この映画は、心身ともに衰えた老人でも、自分の生きたいように生きるんだという新藤自身の生き方でもあるメッセージを投げかけたもので、「姥捨て伝説」に絡ませて描いた。認知症の始まった父親(三國連太郎)と躁うつ病の娘(大竹しのぶ)の丁々発止の演技が素晴らしく、モスクワ国際映画祭でグランプリを受賞した。

その翌年、2000年には『三文役者』を公開。乙羽とともに近代映協発足時からの同志である殿山泰司の生涯を描いた作品である。殿山は1989年に73歳で亡くなっている。

殿山は、自らを「三文役者」と呼んではばからない愛すべき俳優で、そのぶつきらぼうな台詞回しや左肩を落として歩く姿など、ワンカットでも圧倒的な存在感を見

せた。そんなことから、新藤のほかにもほとんどの名匠、巨匠と言われた監督から愛され、生涯に250本以上の作品に出演している。わが国最高の俳優レイヤーと言っている。

そんな殿山の私生活は、酒と女とジャズに明け暮れる毎日だった。これを殿山に扮した竹中直人が見事な怪演で演じ切り、大いに楽しませてくれたものだ。

新藤が90歳を超えて最初に撮ったのが『ふくろつ』(2003年)。

国の失政で餓死寸前に追い込まれた母娘が生きぬくために、公権力に関わる男たちを色仕掛けで誘い、次々と毒殺する話。かつての『藪の中の黒猫』と似たパターンだが、こちらはブラックユーモア仕立てとなっている。母親を演じた大竹しのぶがモスクワ国際映画祭主演女優賞を獲得したほか、新藤にも特別功労賞が贈られた。

それから5年後、新藤96歳の作品が『石内尋常高等小学校・花は散れども』(2008年)である。

これは、新藤自身の若き頃を回顧した作品で、小学校時代の恩師と生徒との長い交流を描いたもの。生徒に親身に寄り添った恩師を通して、現代の教育崩壊の現実を暗

に批判したものであり、反戦の主張を盛り込んだ作品でもある。柄本明、大竹しのぶ、豊川悦司らが出演。

そして、99歳のときに撮った前述の『一枚のハガキ』を遺作として、新藤は100歳で逝った。

思えば、乙羽、殿山という長年の同志を失ったあとは、大竹しのぶ、豊川悦司、柄本明、倍賞美津子、津川雅彦、六平直政、大杉蓮らの名優たちが新藤作品を支えたと言える。

#### 最期まで執念見せた『ヒロシマ』

新藤は最後まで映画を撮ること、とりわけ自分にしか描けない原爆の映画を撮ることに執念を見せていた。5年前に著した『いのちのレッスン』ですでにこう書いている。

「わたしには果たせぬ念願がある。『ヒロシマ』という映画を作りたいと思っている。原爆が炸裂した瞬間、熱線がひらめき、広島の間は虫けらのように焼かれた。その瞬間を映画にしたいのだ。広島を再現し、広島の人が『ピカ・ドン』と表現したその『ピカ・ドン』を映すのだ。原爆の映画はわたし以外にも何本も作られているが、

誰もピカ・ドンを描いていない。シナリオも書いてある。企画書も書いた。広島市長の賛同も得た。しかし……。製作費が20億円かかるのだ。現在、1本の映画が5億円かかるとして、その4倍である。ここでわたしの『ヒロシマ』は頓挫する」

「今こそ20億円がほしい。行政のムダ使いを見直せば、20億円が捻出できるのではないか、しかし、わたしは現実を知っている。20億円はどこからも出てこない。『ピカ・ドン』は映せないのだ。人間が作った地獄の1秒、2秒、3秒をわたしは描きたい。1個の原爆でどんなことが起こるかを描きたい。人間が作った地獄の正体から、人間は目を背けてはならない」

新藤は、100歳にして未だ夢半ばでこの世を去った。その無念の遺志を原爆問題で揺れる今こそ、誰かに継いでほしいものである。映画の職人・新藤兼人氏のご冥福を祈ります。合掌。



追悼・大島渚

## 映画界の風雲児逝く

小泉敦

## とてもいい『愛と希望の街』

昨年新藤兼人が亡くなったと思つたら、今年も新年早々に大島渚の訃報が伝えられた。

好き嫌いはあつたかもしれないが、両人とも映画界の巨人であつたことに誰も異論はないであろう。新藤兼人はわたしと年齢差があつたため完全に同時代の映画人とはいえないが、大島渚はほぼ同時代の映画人といつて差し支えないだろう。

もつとも大島の監督デビュー作となつた『愛と希望の街』(1959)は当時の松竹体制下では冷遇され、ろくな宣伝もされずしたが

つて大した話題にもならなかつた。わたしもついに観る機会のないままこの映画はいつの間にか忘れられてしまった。この作品の再評価が高まるのは大島がビッグネームになつてからである。

しかしこの映画の完成試写を観た当時の松竹首脳たちの困惑ぶりは相当なものであつたらうと想像できる。主題の明快なことは比類がない。50年代後半はヌーヴェル・バーグの嵐が巻き起こつた時代である。テレビの登場でアメリカ映画界は危機感を抱いていたが、日本映画界はテレビドラマなど子供の紙芝居にも及ばないと馬鹿にしきつていたのが実情であつた。映画の黄金期がやがて終わるという認識のカケラも持ちえていなかった。

そんな風潮の中で、まさかこのような作品を自分たちの会社から送り出すなど考えてもみなかつたのだろう。この頃邦画五社は(新東宝を入れれば六社)二本立てで興行がふつうだったから『愛と希望の街』も二本立ての一本として封切りされたと思うがもちろんメインではなくサブのほうであつたと思ふ。わたしはこれを見逃していたため次に観る機会を得たのは実

に十数年後のことであつた。観たのは池袋の映画館だつたと思ふがいまはつきりとは思ひ出せない。

いま現存しているこの映画のビデオは62分である。公開時にこの長さであつたのか、あるいは大島の撮つた最終カットのもの長さが違つていたのか。当時新人監督の彼に編集権などないだろうから、松竹が無理やりハサミを入れて短くしたのか。いくら併映作品でも長編劇映画として62分は短いと思うが、観れば分かるとおりこの作品はこれで十分の長さである。このことの真偽はともかく、望月優子以外は当時無名に近い俳優たちでキャストイングされはしたが映画としてとてもいい。

## いちばん面白い『日本の夜と霧』

それにしてもこれだけの大物監督に対して、日本のマスコミでの扱い方が小さいというか少なかつたことに驚かざるを得ない。森光子が亡くなつた時に較べると、その三分の一もなかつたのではなからうか。これはテレビでのということではあるが、こういうちょっとした違和感は吉本隆明が亡くなつた時にも感じたのだが。いまのマスコミにとつて大島渚はすでに過去の人でしかなくなつたのか。

お笑い番組やアイドル系のものは毎日ウンザリするほど流されていくの。

車椅子での長い闘病生活は映像でたまに見たりすることはあつたが、昔テレビ討論番組が華やかなりし頃の大島渚を知る者にとつて、喋ることに障害をきたした大島渚を見るのはとても複雑な思いがある。あのぐつと相手の顔を真正面から睨むようにして吠えていた大島の姿はいまでも目に焼き付いている。だがそこから一転し話に興がのつてくると時々これ以上はないというような柔和な顔になり笑い声さえ立てて、これがさつきまで吠えていた人と同じ人物なのかと思つたりもした。

これほど感情豊かに自己表現できるのはきつと正直で生真面目な人に違ひないと思つたりしたものである。けれどもわたし自身が大島渚の映画を大好きかというところでもないのである。現に未だに観ていない有名作品が何本もある。かならずしも世間の評価と一致していないのである。観た作品といえばわたしがいちばん面白かつた大島作品を一本挙げるならば『日本の夜と霧』(1960)である。あのワンカット・ワンシーンが連

続するのでも有名になった作品である。俳優がセリフにつまづいてトチろうがまったくお構いなしに撮ったということでも世に知られている映画である。現在とちがってワンカットで目いっぱい撮れる尺数は当時のカメラでは限られていた。当時血気盛んだった大島はこれをたった17日で撮りあげる。だが公開初日映画館はどこもガラガラだった。

ところでわたしが知るかぎり、大島渚が亡くなって追悼特別番組として急ぎよ放送されたのは1月20日のBSテレビ朝日『大島渚の闘い!』だけだったが他にあったのだろうか。映画くらいはやったかもしれないが分からない。この番組は同局が2000年に放送したものの再放送であるから亡くなってからつくったものではない。この番組の取材時点で大島はちょうど68歳であるからいまの自分と同年齢である。彼は1996年2月にロンドンで倒れ一命はとりとめたが右半身が麻痺した。

品となったわけだが妻に支えられつつもこの時はまだしつかりとした大島の姿を見た。大島久々の登場ということではファンや大勢のマスコミ陣も殺到し、いま思えば公式のいちばん華やいだ場所で大島が姿を見せたのはこれが最後ではなかったか。

### 『青春残酷物語』が大ヒット

1932年生まれの大島は大学を出ると難関を突破し1954年松竹に入るのだが、別に映画監督になりたくて入ったのではないという。世の映画青年が聞いたら聞き捨てならないと思うかもしれないが事実である。当時は就職難の時代で大学を出たからといって簡単に就職できるものでもなかった。だがどこかに職を求めなければならず、それが千人に一人とか千人人に一人しか採らないといわれた助監督募集に応募したところ運よく採用されたのである。

映画の世界で生きることを決意してからの大島渚の行動は素早く多くの人が知っているとおりである。大島自身が云っていることだが、『愛と希望の街』が松竹に無視され、作品も一般的に関心を持たれないまま不入りだったことからその後何ヶ月か仕事の話がまった

く来なかった。期間にすればほんの4ヵ月かそこいらのことだったが、この間が生涯の中でもっとも長く感じた空白期間であったという。

その後に来た会社からの仕事が『青春残酷物語』(1960)となる。これが時代の最先端を行く作品とマスコミに評価され映画も空前の大ヒットとなった。映画館は毎回超満員の盛況を呈した。世はヌーヴェル・バーグの風が映画界に吹き荒れていたから、それも追風となって大島はいきなり時代の寵児となった。映画がヒットすれば会社の態度も変わった。会社は『青春残酷物語』の続編を望んでいたが、大島自身は『続』というものは大嫌いで作るつもりはなかったしまたこれまでも絶対作らなかった。次に撮ったのが『太陽の墓場』で炎加代子が大きな話題となった。ここで大島と共同で脚本に参加したのが石堂淑朗であった。釜ヶ崎という社会の底辺に蠢く人間群像、その剥き出しの欲望、人間の本质とはこうだとばかりにどぎつく描かれた。暴力団の抗争を国家や個人に置き換えてみればすぐく分かりやすい。またそのことを意識させずにはおかない大きな

スケールを持った映画でもあった。**家を出ると七人の味方のみ**  
大島はその生涯に長編劇映画を23本作ったがそのすべては自分の撮りたいものだけを撮ってきたというところだけは確かである。『愛と希望の街』はヒットこそしなかったがあれは完全に自分の勝だったと云っている。なぜならあれは自分の撮りたいように撮った映画だからその意味で完全に勝ったと

すると62分というあの長さは別に会社から短くしろと圧力がかかったものではなかったのかもしれない。映画をつくるということは監督の立場からすれば、あれもダメこれもダメという拒否の連続との、いわば抗争の結果の産物であろう。映画会社に所属していればその相手は会社ということになる。しかしその監督作品のすべてにおいて自分の撮りたいように撮ったと云いきれる人がこれまでいったい何人いたのだろうか。

『日本の夜と霧』が不入りということもあって、封切り4日で急きよ上映中止という事態になった。このことが発端となり入社7年目で大島はついに松竹を退社することになる。このことについてインタビューが、せっかく手にした

監督の座を失うということに迷いはなかったのか。処世として他に選択肢もあったのではないかと問われると力強くきっぱりと、そんなことはまったく考えなかったと云いきっている。人生何があってもいい。失いたくない失いたくないと思っているからダメなんだと。また小山明子は大島について、男は家を出れば七人の敵がいるというけれど、大島は家を出ると七人の味方がいるだけで後は全部敵しかいなかった。そう云っていた。

このドキュメンタリーが作られたときは、ああこの人たちもまた元氣だったなあと感慨深いものがあった。創造社を立ち上げたときの同志の一人でもあった俳優の小松方正は、大島渚は昂だったという。また佐藤慶も同志の一人だが、大島は俳優に演技指導など一切しなかつたという。またああしるかこうせよとかの注文もなかつた。要するに君たちはプロなんだろうというのを暗に云っているのと同じで、注文はしないがその代わり撮影現場には必ず手土産を持ってこい。現場に入るまでに自分で考えてから来い。つまりはそういうことだった。

作品を作るにあたって何より大

島が大切にされたのがイメージだったというから、そのことを知らない一般のひとたちは、その俳優の起用などにビックリさせられたりもしたが、これは彼の中ではごく自然なことである。驚くことでも何でもなかつたのである。そういう意味でも話題作りという点で大島渚はなかなかの商売上手な映画監督でもあったと思う。

#### 生涯孤独のヒーロー

ところで大島の次男である新が父親のことを少しだけ語っているのを週刊誌で読んだ(週刊文春1月31日号)。彼は現在映像、ディレクターの仕事をしている。自分は他に共に認めるフアザコンだったという。長男は父親のような仕事にまつたく無縁の人生を選んで、大学で教えている教育者となったが、自分は結局父と同じ道を歩むことになった。彼は大島渚の息子ということであつて嫌な思いも経験している。

それは『愛のコリーダ』裁判がちょうど彼の小学生の時であつたから、周りから当時エロ監督の息子という目で見られたということである。これを読むまで大島の次男が父親と同じ世界に身を置いているとはまったく知らなかつた。

彼の話では、父はいかんせん口数が少なく、人を無用に緊張させるところがあつたという。そういうえば番組収録中のインタビューに向かつて、その質問に腹を立てた大島が突然怒り出す場面があつた。見る側にすれば、そんなに怒るようなことではないと感じただけだ。しかし大島にすればそんな分りきつたつまらない質問などするなということだったのかもしれない。

弔辞を述べた田原総一郎が大島は終生世の中と離れることはなかつた。その最期までふつうの芸術家にはならなかつた。ふつうの芸術家は世間とかけ離れた存在になつてしまふ。しかし大島はそういつたものにはならなかつた。この言葉聞いたら大島はきつと喜んだであろうという気がする。田原とはどこかでウマがあつたのだと思う。

新の話では2009年の喜寿の祝い、この時のために大島は密かに練習を重ねた「巨人の星」を歌つたという。時に意外な人が巨人ファンで驚くことがある。呑み屋で偶然会つた監督の熊井啓も熱烈な巨人ファンで、あなたはどこ

のファンかと詰め寄らなければかりの勢いであつたのを今でも思い出す。

松竹を出て「創造社」を旗揚げした大島はそこで12本の作品を造つた。そして『夏の妹』(1973)を最後に創造社を解散した。その頃大島の中で何か変化があつたのだと思う。語っているのは解散したことへの断片的な部分にすぎないだろうが、要するに創造社のために今度は作品をつくり続けなければならぬといった立場は自分の意思とは微妙なズレを感じていたのだろう。しかしこの仲間があつたからこそ今の自分があるということだけは間違いない、彼らなくしては今日の自分は絶対なかつたと云いきっている。

当時の俳優やスタッフが目を輝かせて毎日撮影現場に集まつて来る。大島が今度は何をやらかそうとしていいのかみんながドキドキしながら参加している。それはなんて幸せなことだろうと思う。

始まりがあるから終りは必ずやってくる。その季節に身を置いた者にしか分からない喜びと哀しみがある。いつも自分の周りに人がいる、そんな賑やかな世界をいつも好んだ大島渚は生涯孤独のヒーローだった。

# 僕のアメコミ映画ランキング

萩原克憲

1位「ウルヴァリン X-MEN ZER0」

アメコミキャラクターの中で僕はウルヴァリンがブツチギリで好きです。作品の力+キャラクターの魅力で、この作品がアメコミ映画僕のナンバーワンです。

2位「X-MEN ファースト・ジェネレーション」

エックスメンの世界観がとにかく好きなんです、その設定自体が存分に生かされた作品。ミュタントという特殊な存在を通じて現実の人間社会にある様々な普遍的な問題が見事に描き出されている何ともしぶい1本です。

3位「X-MEN 2」

ビジュアル的にはオープニングのナイトクロウラーのシーンにやられました。敵と味方が入りまじる独特の世界観が発揮されています。X-MENシリーズがベスト3独占です。

4位「アイアンマン3」

アイアンマンシリーズからはこの間観た3が最上位に入ります。いろんな意味でよくできたハイレベルな作品だと思います。

5位「アベンジャーズ」

ヒーロー大集合のお祭り映画です。ビジュアル的にもカラフルで

とにかく楽しいです。  
6位「スーパーマン」

全身タイツのあんなかつこうで画になるクリストファー・リーブはすごいです。彼こそ永遠のヒーローそのものです。この映画は素敵な素直なヒーロー映画の名作です。

Aランク (おもしろい、好き)

7位「X-MEN」

X-MENシリーズ1作目、特Aクラスに入れようか迷ったんですが、作品の規模が小さく地味な分この位置になりました。でもウルヴァリンの登場シーンもカッコいいし、ログとの関係もしづいし、いいですね。

8位「アイアンマン」

アイアンマンの誕生までの過程がとくにおもしろいです。トニー・スタークIIロバート・ダウニーJr.、すごくはまってると思います。

9位「ダークナイト」

すごい作品です。めちゃくちゃみにもあふれています。ですが、見ているものすごい疲れるし全く楽しくありません。だから順位をつけるのここまですがっちゃいます。

10位「バットマン」

いい感じだと思います。カッコよさとコミカルさと明るさと暗さとリアルっぽさとコミックぽさといい感じのバランスだと思います。

11位「スパイダーマン」

サム・ライミ監督が特有のアクを出さずメジャーエンターテイメントに徹した作りだと思います。シリーズ3作品とも同じテイスト、同じレベルに統一されている感じで僕の順位も3つ並んでしまいました。

12位「スパイダーマン3」

13位「スパイダーマン2」

14位「キャプテン・アメリカ」

作りが丁寧でキャプテン・アメリカのキャラクター同様、好感度の高い良い作品だと思います。

15位「バットマン ビギンズ」

「ダークナイト」につながる硬派な雰囲気ですが、比べたらまだまだソフトな印象。

16位「スーパーマン2 冒険編」

この中で僕が一番はじめにしかも映画館で見た作品。小学校3、4年生くらいだったかと思いますがその時めちゃくちゃおもしろかった記憶があります。

この間、「アイアンマン3」を観に行ってから、今まで観たアメコミ映画に評価の順位をつけてみたくなり、「アメコミ映画ランキング」を作成していました。出来たので発表します。ただし、「ダークナイト ライジング」「アメーシングスパイダーマン」「デアデビル」「ウオッチメン」「ヘルボーイ」「ゴードン・アーミー」など、まだ観てないものけっこうあって、もちろんそれらはランキングされていません。

特Aランク (スペシャルおもしろい、すげー好き)

17位「バットマン オリジナル・ムービー」  
 バットマンには様々なキャラクターのものがあつて、これは最もコミカルな路線の作品。「サメよけのスプレー」とかなんとも言えないおかしさいっぱい隠れたバットマン映画の名作です。

Bランク (まあまあおもしろい、まあまあ好き)  
 18位「インクレディブル ハルク」  
 エドワード・ノートンは好きな俳優なんです、ハルクになるにはどうも合わない感じがしてしつくりこなかったです。アベンジャーズ版のマーク・ラファロはとも合っていると思います。

19位「バットマン フォーエバー」  
 様々なバットマンがありますが、これは一番なんてことない特徴の少ないバットマンだったように思えます。

20位「ヘルボーイ」  
 変わったアメコミで絵が好きでコミックを持つてるんですが、その雰囲気をつっこよく出していて好感がもてます。コミックもそうですが、内容は良く分かりません。続編の方がおもしろいらしいんですが、まだ見ていません。

21位「アイアンマン2」  
 上位に入っている1作目、3作目と違い、この作品は期待はずれでした。ミッキー・ロークとのレース場でのバトルはすごく良かったのですが、後半の展開が僕はともガツカリでした。

22位「マイティ・ソー」  
 「アベンジャーズ」公開に向けて急いでやつつて作ったんじゃないかという稚拙な作りでもおもしろくないんですが、ソーのキャラ同様なんかかわいげがあつてにくめない映画で、きらいじゃないです。

Cランク (つまらない、きらい)  
 23位「バットマン&ロビン M.F. フリーズの逆襲」  
 シュワルツェネッガーがキャスティングされていて期待して映画館に行つてかなり期待外れだった記憶があります。

24位「スーパーマン3 電子の要塞」  
 前作の「スーパーマン2」がすごくおもしろくて、しかも「電子の要塞」という副題に限りなく期待をふくらませていた小学校5年か6年生の夏休み、思ったよりだいぶ規模の小さなコンピュータの敵が1個出てきただけのこの作品

に僕はとても悲しい思いをさせられました。

25位「バットマン リターンズ」  
 前作「バットマン」はとてもいいバランスでしたが、2作目はティム・バートンのダークサイドが全面に出すぎ、暗すぎて不気味すぎてきらいです。

26位「スーパーマン リターンズ」  
 ブライアン・シンガー監督が「X-MEN」の3作目をかけて念願の「スーパーマン」をリメイクした。主演にクリストファー・リーヴに似た俳優を起用してあり、似ている分ニセモノのように見えてしまふ作品に気持ちが入らず、見終つてからホンモノが見たくなりクリストファー・リーヴの「スーパーマン」をすぐに見直しました。

27位「スーパーマン4 最強の敵」  
 ひさびさのスーパーマンシリーズの続編だったのですが、なんだかB級映画になり下がったような作品でした。

28位「X-MEN ファイナル・デンジョン」  
 前2作の世界観をつくってきたブライアン・シンガー監督が「スーパーマン リターンズ」の方を選択してしまい、大好きな「X-

MEN」シリーズの締めくくりが不満いっぱい作品になってしまいました。そして「スーパーマン リターンズ」は興業的にもコケたみたいで、この選択は「ブライアンの大間違い」として僕にも大きなダメージを与えました。

29位「ファンタスティックフォー 超能力ユニット」  
 とるに足らない内容でした。

30位「スポーン」  
 日本でもコミックもフィギュアも売れ大ブームになっていたなか公開され、そのブームの火を自ら消し去った「火消し映画」。期待をふくらませて見に行つた僕の「期待の火」ものの見事に消してくれました。

31位「ハルク」  
 最新のアカデミー賞で「ライフ・オブ・パイ」で監督賞をとったアン・リー監督の監督人生の汚点といつていいんじゃないでしょうか？ まじつまらなかつた。



——無機的な、からっぽな、  
ニュートラルな、中間色の、  
富裕な、抜目がない——

鈴木輝夫

私の中の二十五年間を考えると、その空虚に今さらびつくりする。私はほとんど「生きた」とはいえない。鼻をつまみながら通りすぎたのだ。二十五年前に私が憎んだものは、多少形を変えはしたが、今もあいかわらずしぶとく生き永らえている。生き永らえているどころか、おどろくべき繁殖力で日本中に完全に浸透してしまった。それは戦後民主主義とそこから生ずる偽善というおそるべきバチルスである。こんな偽善と詐術は、アメリカの占領と共に終わる

だろう、と考えていた私はずいぶん甘かった。

おどろくべきことには、日本人は自ら進んで、それを自分の体質とすることを選んだのである。政治も、経済も、社会も、文化ですら。

私は昭和二十年から三十二年ごろまで、大人しい芸術至上主義者だと思われていた。私はただ冷笑していたのだ。或る種のひよわな青年は、抵抗の方法として冷笑しか知らないのである。そのうちに私は、自分の冷笑・自分のシニズムに対してこそ戦わなければならぬ、と感じるようになった。この二十五年間、認識は私に不幸しかもたらさなかつた。私の幸福はすべて別の源泉から汲まれたものである。なるほど私は小説を書きつけてきた。戯曲もたくさん書いた。しかし作品をいくらか積み重ねても、作者にとつては排泄物を積み重ねたのと同じことである。その結果賢明になることは断じてない。そうかと云って、美しいほど愚かになれるわけではない。

(傍点は、読者にこの一文の意

のある処をより注視させんが為、  
敢えて私が付けた)

やがて、この男の伝説となる可き必然を孕んだ短い一文は、かくの如く強烈なる自己譴悔性と痛ましいまでの諧謔性から始まっているのであるが、それは文が進むうちに増々昂じていき、今改めて読み返してみても、一種の怖気すら感じて仕舞う。この一文を書いた時、この男は既に決断していたのである。いや、恐らくこの時より大分前から。

残念ながら私は、この一文をリアルタイムで読んではいない。文章が載つたのは、昭和四十五年七月七日付のサンケイ新聞(現在は産経新聞)で、時の編集部が求めたエッセイのテーマは「戦後二十五年」であった。この男の短い一文は、「果たし得ていない約束——私の二十五年」と題されていたのだが、タイトル自体も本人に因るものである。そうである。正に、あの敗戦から二十五年目に当たる昭和四十五年に書かれたのである。既に今年はその時から四十三年も経っているのである。あの敗戦(一般には終戦と糊塗されているのだが……)から、実に六十八年

経つたのだ。

昨年(一九九四年)の十月二十四日。百五十本以上の作品を作り続け、更には他者の作品の製作、果ては役者(II)として出演した一人の映画監督が、丸で、その作品群の大方が激しいまでの毀誉褒貶に晒された如くある意味で表象するかの様な、実に、彼の人のらしいと言えは彼の人のらしい呆気ない死に方をした。タクシに撥ねられての死。場所は新宿である。彼の人生の軌跡は飽く迄も破天荒。

『ひき裂かれた情事』『胎児が密漁する時』『犯された白衣』『日本暴行闇黒史 異常者の血』『処女ゲバゲバ』『ゆけゆけ二度目の処女』昭和四十年代に監督した彼の作品を極一部書き出したが、何とも鮮烈でかつまた刺激的であり、世の良識派と称される人々、譬えば世界的な巨匠、譬えば当時テレビで有名な映画評論家、譬えば映画産業労働組合の幹部などが、肝胆を寒からしむるのも宜なる哉である。彼の名は若松孝二。ピンク映画の監督。語り、十八歳未満禁止の成人映画の監督である。私の若松孝二作品との接点は、昭和四十三

年から四十八年頃迄と短く、それ以降、今に到るまで若松の映画を見る事は絶えてない。である故、私は決して彼の作品の熱心なる鑑賞者ではないのだし、況や、身の程知らずにも、彼に就いての映画論を開陳するだけの見識などない。

若い私が見ていた頃の若松のピンク映画は、一言で言わば凄まじい迄の暴力的エロに尽き、返ってその余りの激烈なる過剰さが、欲情の代替物その物としての価値を奪っているかの様に思えた。私の欲情がエロ映画に求めていたのは、妖しく生めく豊麗な女の裸身であり、身悶えしながら男に抱かれる女の姿態であり、性の快楽に感溺して悶えのたうつ女体であったのだ。

若松のピンク映画は一般的なそれとは明らかに違い、女を何の躊躇いもなく素っ裸にひん剥き、欲望の情動に総てを放擲して犯し捲り、剩<sup>まじ</sup>え、少しでも気に食わなければ立ち所に殺戮して仕舞う。更には、その真逆様の甘えと優しさの緋い交ぜになった女その物への憧憬とか、聖性としての子宮回帰願望とかを、飽く迄も暴力的かつ扇情的に描くかだ。

性、テロル、差別、反権力、反権威、

革命、暴力、愛欲、性欲……若松のエロ映画には、それらが輻輳的に絡まり合って強烈なメッセージとなり、更に言わば、強烈なメッセージが時として生理的な嫌悪感すら感じさせて仕舞う。他の性的興奮を呼び起こす事を唯一の目的としたこの種の映画群とは、驚く程の絶対的な差異が感じられる。

恐らく、若き日の私が一番映画を見たのは、新宿にあった任侠映画の聖地の昭和館であろう。その隣の昭和地下は三本立ての陰気臭いピンク映画専門館で、エロ映画を見るのには陰気臭さが何とも言えずよく、エロ映画を見るのは昭和地下と決めていた。が、若松のエロ映画だけは違った。そう、同じ新宿でも「難しい映画」、取分け、「コアな難しい映画」を常日上映していたATG 蠍座。若松のエロ映画だけは、大方そこで見たのだ。何を言いたいかと言うと、あの当時に一部とは言え、若松の映画は単なるエロ映画ではないと、認識する者達が少数ながらいた事を意見している。

若松のフィルムモグラフィ『若松孝二 反権力の肖像』四方田犬彦・平沢剛編、作品社刊を参照)を見ると、昭和五十七年頃を境と

して明らかな変化が判る。あれ程激烈に描いた女の凌辱性や苛虐性、或いはその真逆様の母性への只管な渴望はその作品から影を潜め、直接的な粗野・粗暴なエロ感とは明らかに違う形へと昇華されていくのが感じられる。

それはこの間彼が、「エロの巨匠」として映画界や映画ファンに、一定の認知を得て評価を高からしめた事はあったのだが、時代相は、「70年安保」(昭和四十五年)を頂点として革命、反乱、ゲバルト、テロルなどの命題は急速に意味を失っていったのであり、恐らく若松は、今迄の自分の立脚点を越えてのより深掘りを迫られていたのでは……。

「三島由紀夫」だから見る気になったのである。否、「三島の割腹自殺」をテーマにしたから見る気になったのである。再度、否、より正確には、「三島由紀夫の割腹自決をあの若松孝二が描いたから」、見たかったのである。

三島由紀夫と若松孝二。敵である筈だ。通俗的な認識に於ては、一方は「極右の名声赫々たる天才

文士」であり、また一方は「極左崩れのエロを専らとした監督」である。何所までも交差する筈なき二人の軌跡。殊に三島が自決した昭和四十五年頃は、「70年安保」であり、三島と若松は相容れない絶対的敵である。

兎も角、見たかった『シネマ気球』の創刊号にも「私にはもう映画はない」と書いたのだが、あれから長い時を経たが情況に何ら変わりはない。寧ろ、今はあの頃より酷い。もう映画は全く見ない。

であるから、今の私には映画に就いて書く可き何物もない。因って、この駄文は「義理に駆られた白刃の出入」の健サンなのである。語り、古い友人である編集長への義理に駆られての一文なのであり、有り体に言って田舎のオッサンの妄言である。健サンであれば躊躇なくすつくと白靴を取るであろうが、そこは度胸も体力も銭もない田舎のオッサンなので、躊躇わずに関西の裏ビデオ屋(今は裏DVD屋と言った方が宜しいのだが……)から、金二百円(!!)で違法コピーの『11・25自決の日』三島由紀夫と若者たち)を入手して見た。どうでもよい事なのだが、近年はインターネット全盛の所為

か裏ビデオ屋はもう商売にならず、合法アダルトDVDは疎か一般映画までも違法コピーし、何とかシノギをしているらしい。ヤクザと同様、裏ビデオ屋も最近のシノギはなかなか大変らしい。

映画のファーストシーンは、十七歳の右翼少年、山口二矢の少年鑑別所内での自殺から始まる。右翼であった山口二矢は、大きく国論を二分した(60年安保)昭和三十五年(騒動)の中、当時の社会党委員長(浅沼稻次郎)を、公開立合い演説会の会場である日比谷公会堂壇上で刺殺した。右翼テロである。

この右翼の一少年の凶行に世間は大変な驚愕を示し、マスコミは挙ってテロルを糾弾したのだが、左翼陣営は元より、一部の右翼からも「こうこうたる非難の声が巻き起った。映画が進行していくと判るのだが、ファーストシーンに三島の自決時(昭和四十二年)から十二年も前に起った山口二矢の自殺を持つてきたのは、その試みが完全に効果を上げているかどうかは兎も角、若松なりの伏線の張り方なのであり、所謂、世間一般が称している「三島事件」への、彼の始原的な興味の有り様が判るのだ。次に、森田必勝の高校時代が短

く描かれる。森田必勝。後に、三島と共に割腹した青年である。三島が私費を費やして作った私設の軍隊、「楯の会」。彼はその学生長だった男である。森田は昭和四十一年、早稲田大学教育学部に入学する。折しも早稲田では、学費値上げ撤回と学生会館の自主管理運営を求め、早大史上始めての全学ストライキが起っており、全学共闘会議に結集した多くの学生達は、学内にバリケードを作って教室や校内の施設を占拠した。

新入生の森田の眼から見れば、新左翼或いは彼らと同調した学生達の余りの傍若無人振りは、母校早稲田それ自体を危機に落し込む行為であり、絶対に看過できるものではなかった。森田は右翼学生団体「日本学生同盟」、通称「日学同」を先輩らと作る。日学同の学生らと三島との接点は、彼らの機関誌の創刊号に原稿料なしで一文を提供した事に因る。元々三島は彼ら学生の思想に共鳴的であったし、何より彼らの純なる魂に感動したので。その直後、三島は陸上自衛隊に体験入隊を繰り返して激しいレインジャー訓練を受けたり、前々からやっていたボディービルや剣道や居合道に打ち込み、更に

は、何を思ったのか空手までも習い始めている。映画では三島のそれらの行為を淡々と描いている。私は、「軽い失望」を感じていた。私は三島のそれらの行為を、評論家やジャーナリストの複数の著作で知っていた。三島の行為に賛同する者、批判的な者、興味本位的な者、冷笑的な者、立場は様々であったがそれらからもたらされる情報で知る限り、映画も大筋に於いて事実関係にはほぼ間違いはない。

今や三島は、少年時代学習院の同級生からかわれた、あの「青瓢箪の文弱の徒」ではなかった。軍医の誤診とは言え、兵隊検査で不合格になった病弱で瘦せ細っていた肢体は、アポロンの如くの或いは古代剣闘士の如くの躍動を秘めて赫奕として存在し、丸で、彼の小説の主人公の様な鋼鉄の肉体として輝き出したのである。

だがしかし、三島由紀夫の、いや幼少の頃から「女みたいだ」と揶揄された平岡公威の精神その物は、その肉体と共に変り得たのであるうか……。私が長い間疑問に思っていたその事を、若松は是非描いて欲しかった。果して肉体を鍛え抜けば、精神までもが自ずと鍛錬されて強靱になれるのである

うか？

私は「若松映画」を期待していたのだ。それも私が昔見た、あの若松映画を。強烈なる恣意性に色取られた若松のエロ映画は、巧まらずに、観客にある種の嫌悪感すら与えるのだが、そこに、彼の偏頗ではあるのだが絶対的な確信犯の如きの凄まじさは、まじまじと感じさせた。有り体に言って、私は——若松の偏頗なる三島観——こそ見たかったのだが……。

昭和四十三年、私は三流大学に入ったので上京した。それに因つて、兎も角にも彼らと、より正確に記せば過激派左翼学生や森田らの様な民族派左翼学生と、同時代性の只中に生きたのである。更には、三島由紀夫なる作家も。勉強のできない田舎の高校生には、三島の作品などに全く関心はなかった。講義は何ともつまらなく、最初の夏休みがくる頃には殆ど出席しなくなつた。が、東京は私を大きく変え始めていた。付和雷同であったやも知れない。その年の秋、「10・21国際反戦デー」の日の夜、めちやくちやに破壊さ

れた新宿駅構内にいた。到る所にバリケードが築かれ、火の手は随所で上がった。新宿騒乱事件と呼ばれる。戦後始めて「騒乱罪」が適用された。この映画では、それを含めた過激派セクト学生や全共闘学生が惹起した一連の事件が、当時の白黒ニュース映画を使って描かれている。

三島由紀夫は期待していたのである。否、切望していた。彼ら左翼過激派達は、必ずや、来たる可き「70年安保」に日本をカオス状態に落ち込ませ、最早、警察力だけではそれに対処できなくなる日の来たらん事を。その時にこそ、戦後ずっと継子(まねこ)であり続けた自衛隊が「治安出動」して左翼勢力を完全に制圧し、而して彼らを、光輝ある帝国陸軍の後裔たる真の国軍にならしめんと。

三島は戦後を、アメリカに与えられた戦後民主主義を、その先棒を担いだ知識人達を、蛇蝎(へびくも)の如く嫌って心から憎んだ。が、彼もまた紛う事なき戦後最高の知識人の一人である。であるから、三島は戦後知識人の欺瞞性が手に取る様に判ったのだ。それは冒頭で引用した三島の一文でも痛い程に判るのだが、その文の中段では更に凄

まじい展開で己を追い込んでいる。

肉体のはかなさと文学の強靱との、又、文学のほのかさと肉体の剛毅との、極度のコントラストと無理強いの結果とは、私のむかしからの夢であり、これは多分ヨーロッパのどんな作家もかつて企てなかつたことであり、もしそれが完全に成就されれば、作者者と作られる者の一致、ボードレール流に言えば、「死刑囚たり且つ死刑執行人」たることが可能になるのだ。作者と作られる者との乖離に、芸術家の孤独と倒錯した矜持を発見したときに、近代がはじまつたのではなからうか。私のこの「近代」という意見は、古代についても妥当するものであり、万葉集でいえば大伴家持、ギリシア悲劇でいえばエウリピデスが、すでにこの種の「近代」を代表しているのである。

改めて読み返しても、三島の「近代」の認識に、二度三度と驚かざるを得ない。大伴家持やエウリピデス(ギリシヤ悲劇の詩人、作品に

は『メディア』、『トロイアの女たち』などがある)以前の精神と肉体との完全なる一致こそが……。

若松の映画は「奈落の絶望」へと落ち込んでいく三島の姿を、哀惜或いは愛情とも言つていい一種のシンパシーを以て描いていて、昔の若松しか知らない私には、些か戸惑いを覚えた。私は前記した様に、「若松の偏頗なる三島観」を期待して『11・25自決の日 三島由紀夫と若者たち』を、見始めたのだから。三島由紀夫及び彼の割腹と言う極めて異様・異常な自決に就いては、我が国ばかりか世界中の所謂識者達、更には彼に関わりのあつたあらゆる人物達が、それこそ雨後の筍の如く夥しい数々の著作物をものしている。

鑽仰(せんぎょう)、驚愕(きょうがく)、嫌悪(けんあく)、誹謗(ひぼう)、不安……。人それぞれの哲学や思想や政治観や文学観や死生観に因り、その認識の違いは月と蠶(うづぼん)と地程の絶対的な隔絶を感じる。それである故、極左としての若松の三島観こそを見たかった。私が軽い失望と書いた一つの所以は、そこら辺りにもあつた。私の若松への認識は、彼の若い頃の作品のままで止つている。更に言わば、彼の深化或いは進化を思考していなかった。愚

かにも……。

勿論、若松自身も徐々に変貌して、もうエロ映画は撮らなくなつて、もう事を知つていたのだが、決してそんな表層的な事ではなく、『11・25自決の日 三島由紀夫と若者たち』を見終つて痛感したのは、若しかしたら、ひよつとして若い頃の私の若松のエロ映画の認識が、余りにも余りにも皮相的であつたのではないかと言う事であつた。

あの頃の私は、只管、若松の描くエロと暴力のピンク映画に、極左としての貌のみを見ていたのだ。思想や哲学や思弁とは、その様に単純な所には決して納まるものではない。

反権力とは、譬え極左であつても、譬え極右であつても、その因つて立つ悲しさ故に、その孤絶故に、共に屹立し得るのである。ルポライターであり映画評論家でもあつた竹中芳は、後年、「左右を弁別せず」と書いた。この作品で描かれる三島へのある種のシンパシー。そしてそれにも増さる若き森田へのシンパシー。いや、私には彼らへの絶大なるオマージュであるとする感じられる。

無論、三島は左翼思想一般が大嫌いであつたのだが、それに負け

ず劣らず、いや場合に因つてはそれ以上の激しさで、戦後の保守と言われている勢力を不愉快に思っていた。自らアメリカに黙々として働き、剩さ、奴隷の如くの卑屈を見せて媚を売り続ける輩。そんな連中が、ほぼ一貫して戦後の政権を取ってきた。巧妙と狡猾と欺瞞。日本は日本でなくなつて仕舞つた——。三島はかく思つた。

極左であり続けた若松も、三島の同様の意味に於て、戦後体制の矛盾やあざとさを、暴力とエロとテロルとに因つて、先鋭的に描写してきたのである。三、四年前、

哲学が専門である埼玉大学名誉教授長谷川三千子は、三島の死を、「彼は間違ひなくわれわれに死を与へてくれた」(傍点は彼女に因る)、と喝破した。何でも、フランスのポスト構造主義の哲学者ジャック・デリダの著書に、『死を与える』と名付けられた書があるらしいのだ。ポスト構造主義なる哲学が如何なる論なのか、私には理解するだけの能力は全くないのであるが、長谷川は「われわれは、いまだにその受け取り方(三島の死注は鈴木)を知らないのである」とも書き、更には、三島の死は神学的なものであり、その様にして

見る時、「はじめてわれわれは、彼の死を受け取る、ことができるのである」と記している。

死を与えるとは如何なる事なのかと、私なりにもつと考えてみた。気が持するのだが、最早、紙幅が尽き様としてゐる。急げ——。引用している三島の「果たし得ていない約束——私の中の二十五年」は、最後に次の様な文章を書いてゐる。三島を論じた多くの論者がこの部分をしばしば引用する為、「伝説の中の伝説」になつた感すらある。

このまま行つたら「日本」はなくなつてしまふのではないかという感を日ましに深くする。日本はなくなつて、その代わりに、無機的な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜目がない、或る経済大国が極東の一角に残るのである。

それでもいいと思つてゐる人たちと、私は口をきく気にもなれなくなつてゐるのである。

映画ではこの一文には全く触れていないのだが、三島が自決する僅か四ヶ月前に書かれたこの文章

程、彼の人の絶対的な絶望を果敢に現している物はなく、映画はほぼ忠実にこの「思想」を描いている。丸で、その思想に共鳴するかの如くの痛恨の悲しびを見せて——。映画の冒頭で山口二矢の自殺を描いているが、それから十年近くの後、三島邸に一人の青年が訪ねてこの様な質問をする。

「先生は何時死ぬんですか？」

三島は思わず絶句する。青年は三島作品の熱烈なファン。そしてその青年の貌は、彼の山口二矢に変わっていく。訪ねた無名の青年が三島に向かつてその様に言つたのは事実であるのだが、勿論、三島がその青年の貌に山口二矢を見たのは、若松の考えたフィクションである。「60年安保」と「70年安保」。二つの自死はそれぞれを表象している。闘争は常に贅を求め、それでも、人は「闘争」を止めない人間である限り——。

最後に、再三書いているが、映画のないオッサンの繰り言を『唐獅子牡丹』の一節を揶揄半分で使つた。が、レコード・テープ・CDにもなつてゐる定番の歌詞を使わなかつた。否、使えなかつた。それには些かの仔細があつた。三

島由紀夫と森田必勝を始めとする四人の「楯の会」の若者達が、陸上自衛隊東部方面総監部のある市ヶ谷駐屯地に向かう車中で、何と彼ら全員は、あの『唐獅子牡丹』を楽し気に合唱するのだ。

カメラは一番、二番と唄う彼ら五人を延々と撮る。私はその事を今迄全く知らず、この映画で始めて知つた。恐らく、実際もその様にしたのだらう。言うまでもなく、『昭和残侠传』シリーズでは、花田秀次郎(高倉健)と風間重吉(池部良)の「連帯の道行」の時に、必ず流れる歌なのだ。「義理と人情を秤にかけりや、義理が重たい男の世界」とは、この映画を見終つたあとでは如何しても使えなかつた。彼ら五人が「赤き着物か白き着物」の時、決然として唄つた定番の歌詞の『唐獅子牡丹』。冗談半分のおふざけで使うのは、三島を始めとする五人を限りなく冒涇する気がしたのだ。

背で泣いてゐる唐獅子よ、三島由紀夫の為に、森田必勝の為に、もつともつと慟哭け。そして、若松孝二の為に。叛逆者の漢の背中の唐獅子は、常として泣き続けて征のだ。

筆者の近況

山下雄平 平成10年7月号から描いている「法人かまた」や、ミニコミ誌「おとなりさん」の表紙から厳選された私の水彩画10枚が、フレーム切手「多彩なまちなみ」として、今年4月1日に日本郵政から大田区の郵便局限定で、1600シート発売され、おかげさまで完売。ネットで調べたら、すでにプレミアがついていた……。二匹目のドジョウを狙ってか、ハーツ&マインズ社が来年平成26年のカレンダーを企画。大田区の書店で見かけたら完売にご協力を……。ちなみに、切手もカレンダーもシネマ気球の原稿も、名誉なこととおもい無償です(笑)。

**門馬德行** 鉛筆だけを使って(絵本もどき)を描いている。映画と違い、絵と絵の間に見えないドラマを感じさせないといけない。また(な)を描くのか」というのが肝心でテーマを見つめるのがひと苦勞。さらに子供向きに書くことがとてもできない。最近、なかなか芝居を描けなくなつたという友人の脚本家の気持ちが良いわかる。今夜もコーヒーを啜りながら時間ばかりつぶしている。

**岩館範子** アメリカやイギリスのTVシリーズはたくさんあります。いちおしは『スーパーナチュラル』略して『スパナチュ』です。イケメン兄弟が日々魔物などをやっつけていく話です。私は兄のデザインが大好きですが、弟のサムもファンも多いです。天使と悪魔もでてくるし、ヴァンパイアもできます。俳優のジェフリー・ディーン・モーガンが目当てでみはじめたのですが、時々映画ネタがでてきたりして楽しいですよ。はまっています。

**里中智子** 近況は、特に変わりなしです。毎日、強烈な暑さにさらされぐったりしています。今は真夏を無事に乗り切れるよう挑戦者の気分です。暑さで死にたくないですからね、皆様も大切になさってください。

**中田好美** 最近「ラジコ」というネットで聴けるラジオに嵌っています。TBSラジオで放送されている「司馬遼太郎短編集傑作選」の朗読がお気に入りです。作品毎に朗読声優が変わるのも楽しみのひとつです。臉を閉じ、耳を傾け作品の世界に浸っています。

**堀江広子** 去年の暮れに、斉藤和義という人の「やさしくなりたい」

を初めて聴き、心が震えました。いい歌を作る方がまだいるのですね。

**関口健一** 隣の映画館が4月に閉館して、千葉駅は駅舎の建て替え工事中。車椅子の私にとって、映画館に行きづらい環境になりました。それでも映画を見に行きたくて、ちよつと足を延ばして海浜幕張の映画館まで行ってきました。車椅子でも、見やすい映画館でした。

**今市文明** 1日おきの病院のベッド上でDVDプレーヤーでレンタルDVDの作品を観たり、家ではBSで昔面白かった作品を観たりして過ごしています。映画館で最近観た作品では木下恵介監督の若い頃の挫折期を描いた『はじまりのみち』が印象に残っています。

**藤井陽子** 湿度計の最強癖っ毛を持つ私はカラ梅雨に内心ガツッポーズ。一気に暑くなつた最近、久々のイラスト個展に向けてスタートを切りました。バイトとの両立頑張るぞ!

**小泉敦** 不思議なことはあるものだ。昨年12月の時点で自分の体重は72キロであった。それが今年2月9日には63・7キロになつていたのである。それから4ヶ月くら

いは61〜62キロ前後を推移していたが先日ついに60キロを下回った。これはもう自分が十代の時の体重である。体重減と同じようにウエストが細くなつたのは感じていた。94センチのズボンをずっと長い間穿いてきたがみんなブカブカである。ふつうは体に異変でも起こつたのではないかと思うが自覚するような症状は何もない。但し3年ほど病院には行っていないし健康診断も受けていない。おまけに毎日の食欲は旺盛である。謎だ。

**萩原克憲** はじめまして。四〇代の鍼灸マッサージ師です。5歳と1歳の女の子の父親です。上の娘は僕の影響でアメモヒローが好きなんです、なぜかハルクが大好きです。

**関田孝正** 5月の健康診断の結果は、あいかわらずのメタボ予備群だった。がっかり。減量の努力(昨年の69キロから現在64キロ)など全然みていないのでは。太っている人間は一律にメタボと判定するのではないのか。パソコンが故障してしまった。修理の部品がないというので、やむなく買い換えたい。もつたない。セットアップとか使えるようにするまでがいっぱ大変。やれやれ。

## 中国武術家たちの盛衰描く

戦前から戦後にかけての中国における武術家(中国拳法)たちの盛衰を描いた物語だ。

武術家にとって大切なものは、もちろん技なのであるが、強さに加えて心(思想)が伴わなければならぬという。本作でも、技に対していかに心が卓越するかが重要なテーマとなっている。強ければそれでよいのかとの問いかけは、映画・小説など武術ものの永遠のテーマといえよう。黒澤明の『姿三四郎』においても、三四郎が蓮の池に飛び込んで技に慢心していた自身自身を戒め悟りの境地に至る場面があった。それだけ人間の心は弱い、強くなれないということでもある。いかに心を強くもつか。いかに技を凌ぐ心をもつべきか。

戦前の中国では、妓楼が裕福な人々にとつての社交場であり、多くの武術家もそこに集っていた。主人公の葉問(トニー・レオン)もその一人。心技とも優れており、武術界の跡目を継ぐほどの人物で、

## グランド・マスター

妻子ともども平和な家庭を築いていた。日本軍が侵攻してくるまでは――。

彼らの頂点に立つ宗匠(グランド・マスター)・宮宝森(ワン・チンシアン)は高齢となり、武術界の次期後継を選任するにあたって、相手の技量のみならず、心も審査する。高度な技を修得した者同士の間で高問答が交わされる。宮宝森の高弟・馬三(マックス・チャン)も後継候補のひとりであったが、心の部分に問題ありと判定された。「退く」ことの意味を理解できなかつたためだ。「捨てて勝つ」というような、攻めるばかりがいいのではないというようなこととなるだろう。現にこの馬三は侵略者・日本の手先となり、逆恨みから師匠の命まで奪ってしまう。

父を馬三に殺された娘の宮若梅(チャン・ツイイー)『初恋の来た道』の可憐な少女役も印象深い。本作の信念に生きる女武術家も凛々しく魅力的)は、「復讐してはならない」という父の遺言に反し、父の盟友たちの説得さえをも振り切って身も心も復讐に捧げてしま

う。彼女は結局、良縁に恵まれていたのにそれを蹴り、さらに武術家の家に生まれてきた宿命――技を子孫に伝えるという使命までも捨ててしまう。幼少の頃から父の手ほどきを受け技を磨いてきたが、心の部分で自分に負けてしまったということであろうか。復讐は復讐の連鎖しか生まず、どこかで断ち切らなければならない。頭ではわかるのだが、そう簡単には割り切れないのであろう。むずかしいところである――。

彼らの、骨の砕ける音が聞こえるかのように激しい、超絶の技が次から次へと出される闘いが繰り広げられる。雨中で、妓楼内で――。とくに、宮若梅と馬三との、雪の降りしきるプラットホーム上での戦いが、シチュエーションとして最高である。停車中の汽車が走りはじめ徐々に速度を上げるすぐ脇、車両に接触して事故死してもおかしくない状況下で死力を尽くして闘うのである。武術指導はユエン・ウーピン。ジャッキー・チェンの『ドラクモンスター/酔拳』を監督したほか、『マトリックス』『グリーン・デスティニー』『キル・ビル』などの武術指導を担当、華麗なアクションシーンを創出して映

画の面白さを倍増させたが、それは本作でも健在だった。

葉問の生活をどん底に突き落とした日本軍の蛮行をワンカットで表現したのは秀逸である。日本軍が中国で何をしたかが瞬時に理解できる。

愛情表現も抑制が効いていて画面を引き締める。葉問が妻の足を盥の湯で洗い清めるシーン、葉問と宮若梅との防寒着の外れたボタンのやりとりなどがいい。監督はウォン・カーウアイ。1960年代の香港を舞台にした新聞社員と秘書の不倫を描いた『花様年華』(2000)も純愛(不倫なのに純愛というのは矛盾?)だった。カメラを縦に横に移動して思い入れたっぷりに描いていた。ナットキング・コールの歌が気分を盛り上げた。本作でも、ドラマを壊す冗漫な映画音楽が多いなかで、梅林茂の音楽はドラマにマッチして効果的だった。

葉問は現在の人物で、戦後多くの弟子を育てた。そのなかにブルース・リーもいたという。



(関田孝正)